



(號九十九百二第)

明治三十年二月二十四日第三種郵便物認可  
大正九年二月一日發行(毎月一日發行)

賀正

念珠ならは小野嘉助店へ  
日蓮宗各本山御用達  
顯本法華宗妙滿寺御用達

**御念珠各種**  
弊店の特色は實用を旨とし從來  
調進仕り候へば多少に不拘御用  
命願上候

京都市寺町通鎗藥師下ル  
念珠商 **小野嘉助**  
電話 中二六〇八番  
振替口座大阪一九七二〇番

**布眼の藥** 効能、たゞれ目、かすみ  
目、うち目、つかれ目、はやり目、トラホ  
ーム等  
價壹瓶、拾五錢、廿錢、卅錢、五拾錢、  
七拾錢、壹圓

**血の藥** 定價二包入拾五錢、十  
田五包入壹圓、効能、男  
女ちの道、産前産後、めまい、たちくらみ、  
時候あたり、氣絶、のみすぎ、酒毒、婦人  
病、貧血疾、風邪

千葉縣山武郡源村上布田參百番地藥王寺  
布眼藥 **本舖 齋藤 日章**  
田血の藥 (御注文は總へて下記振替に)  
賀正 (振替東京第六七九一番)

日蓮各宗 寺院 御僧

法衣 草木 直に御聯想下  
京都 三條通鳥丸東入ル町  
**草木本店**  
電話 中七三五番  
振替口座東京二一五五九番

東京淺草區三好町二番地  
**草木支店**  
電話 下谷三四三四番  
振替口座東京二四五六八番

荷も神佛具を調製する敬虔心を以て奉事仕候。

**佛像佛具 調度所**  
宮殿幢天蓋一式

▲普通品定價郵券貳錢封入送呈  
總本山身延山  
總本山妙滿寺  
大本山本國寺  
日宗各教團

京都寺町四條南大雲院前  
**辻井岩次郎**  
振替大阪八一五七番  
電話 下三二五八番

佛壇、佛具一切卸小賣  
各宗御木山御用道  
畫佛表具師 長距離電話中二七八三番  
大佛表具師 振替口座東京二〇七三番  
同區小橋東入

卸部 **三法堂 藤田總治**  
京都市三條通小橋西入中島町

各宗御木山御用道  
畫佛表具師 長距離電話中二七八三番  
大佛表具師 振替口座東京二〇七三番  
同區小橋東入

小賣部 **三法堂佛具陳列場**

發行所東京市淺草區北清島町十四番地編輯兼發行人松尾英四郎△印刷人鈴木日雄(▲本誌定價一冊十三錢郵稅五風)

時言

大詔煥發——民約の舊夢——過激派の秘密語——佛教と民主國——  
現代の大患——不謹慎の言論——平和の喜悅——友邦の協同——國  
家の負荷——奮勵自強——萬國の公是——浮華戒飭——一心協同——  
——一心精進

本多日生

佛教信仰の正統

佛徒唯一の誓願

日本國と法華經

日蓮主義教義綱要

心性の開發

基督教徒としての大矢氏に與ふ

記事報道十數件

脚河邊の吹雪

野村香明子

生徒募集

千葉縣千葉郡千葉町院內  
(千葉神社裏通)  
(憲兵屯所向横丁)

**私立山口刺繡學校**  
校長 山口京太郎

規則書入用の方は御通知次第校則を  
進呈いたします

平和克復の大詔

朕惟フニ今次ノ大戦亂ハ兵戈五年ニ彌リ世界ヲ聳動セシメタルモ我カ聯合諸友邦勇奮努力ノ威烈ニ頼リ戰氛一掃平和全ク復スルニ至リタルハ朕ノ甚々懌フ所ナリ今斯ノ紛擾ノ局ヲ收メ安寧ヲ將來ニ規ルハ固ヨリ諸友邦ノ協同變理ニ須タサルヘカラス嚮ニ講和會議ノ佛國ニ開カルルヤ朕亦全權委員ヲ簡派シ其ノ商議ニ參セシメシニ平和永遠ノ協定新ニ成リ國際聯盟ノ規模斯ニ立ツ是レ朕カ衷心實ニ欣幸トスル所ナルト共ニ又今後國家負荷ノ重大ナルヲ感セスムハアラサルナリ今ヤ世運一展シ時局丕ニ變ス宜シク奮勵自強隨時順應ノ道ヲ講スヘキノ秋ナリ爾臣民其レ深ク之ニ省ミ進ミテハ萬國ノ公是ニ循ヒ世界ノ大經ニ仗リ以テ聯盟平和ノ實ヲ擧ケムコトヲ思ヒ退イテハ重厚堅實ヲ旨トシ浮華驕奢ヲ戒メ國力ヲ培養シテ時世ノ進運ニ伴ハムコトニ勉メサルヘカラス朕ハ永ク友邦ト偕ニ和平ノ慶ニ頼リ休明ノ澤ヲ同クセムコトヲ期シ朕カ忠良ナル臣民ノ一心協力ニ倚藉シ衆庶ノ康福ヲ充足シ文明ノ風化ヲ廣敷シ益々祖宗ノ洪業ヲ光恢セムコトヲ庶幾フ爾臣民其レ克ク朕カ旨ヲ體セヨ

御名 御璽

大正九年一月十日

各大臣副署

佛是の法華を説いて衆をして歡喜せしめ已つて、尋て是の日に於て天人衆に告げたまはく、諸法實相の義已に汝等が爲に説きつ、我れ今中夜に於て當に涅槃に入るべし、汝一心に精進し、當に放逸を離るべし。

(法華經序品の一節)

時言

本多日生

◎大詔煥發 對獨講和條約は相互に調印を了したるを以て、一月十三日我が至尊陛下は國民に對して平和克復の大詔を煥發したまへり、我が國民は聖旨の在る所を意識して各々その嚮ふ所を正明にし、一意専心聖旨の暢達を期せずんばあるべからず、通憲憲法第二條に、詔を承けては必ず謹め、君は天に則り臣は地に則る、天覆ひ地載せて四時順行し萬物無ずるを得、地天を覆はんとな欲すれば則ち壞れを致すのみ。是を以て君言まへば臣承り、上行へば下倣ふ、詔を承けては必ず謹め、謹まざれば自ら敗ると、この君言臣承の大義は古今に通じて渝はるべくもあらず、今人動もすれば西歐民約の思想に酔ふて、我が國體の本義に遠ざからんとす、是れ實に壞敗を致すの因を知らざるなり、今人氣傲り志卑ふして識見亦淺膚に墮す、故にその言ふ所季年ならずして直ちに失脚を來たす、而して尙且つ覺らず、開短眞に驚くに堪へたり、是れ所謂惡鬼其の身に入りて正心を奪へるが爲めか、日蓮大士世に在まざば必ずや大正の安國論を述作して大に國民を警醒せらるべし、大士は絶叫せり、曰く「鬼神亂るゝが故に人心亂れ、人心亂るゝが故に國家亂る」と、その鬼神と云へるは神秘的に見て言へるなり、その徳教的に誠告する所は如何、曰く「法は體なり、國は影なり、體曲れば影斜なり」と、實に

至言と謂つべきなり、今人は識見の淺膚短なるに省み、先人後人に對して深く恥づべきに非ずや、心ある國士は先づこの點に於て大懺悔の心を生ずべし、大懺悔の心を生ずべし。◎民約の舊夢 今日新思潮の語に酔ふて暗愚の痴態を演ず、その醜眞乎睡棄すべきなり、道徳上の問題に就ては先づ體道用道の關係を會得し、體道は千古に通じ中外に亘りて變動なきを明かにし、用道は時處位に依りて運用の妙諦を講らざるを期し、體用不離の要訣に體達すべきなり。而して政治の問題に就ても亦政治の本義と政治の運用とを領得し、政治の本義は全く道徳に制約せらるゝを確認し、政治の運用は時處位に依りてその適應を敏活ならしむるを要す、今若しこの間の消息を大觀し來らば、彼の民約の思想の如きは竟竟政治運用の末節に過ぎず、之を道徳上の體道より見、又之を政治の本義より見れば、只一箇の形式論に過ぎずして、而もこの形式に由つて果して政治の本義道徳の體道に遠離せざりしかを靜思せよ、今や世界を擧げて道徳に體道あるを忘れ、政治に本義あるを領せず、一時的發作的思想に驅られて右往左往せるに過ぎず、その顯著なるものを擧ぐれば、歐洲大戰亂に現はれたる殘害慘禍、不義不正を第一とし、露國の變革に伴ふ崩壞紊亂、英米等に於ける勞働運動の橫暴、民心の不安、米國の國際聯盟に對する態度、支那の民心の不統一等、擧げ來れば一として民約思想より起れる失態にあらざるは無し。近時米國に於て「デモクラシー禍」又は「デモクラシーの失敗」を論道する者ありと、是れ後れたりと雖も今尙ほ醉へるには

勝れり、彼等は今にして言ふ、何れの國も労働問題が國家を眼中に置かざる時、忽ち露國の覆轍を履むべし一と、是れ最初より自明の事に屬す、露國の變革に對して祝電を送りし者輩にして今この言を發す、是れ明かに識見の淺薄短視を示すの好適例に非ずや、今日高調せらるる新思潮の多くも、季年ならずして亦只その間短を示すに過ぎざるべし。

◎過激派の秘密語 過激派の傳播は眞に遼原の火に似たり、彼れ過激派は自稱文明人を嘲つて曰く、自稱文明人よ、汝等は、自由の語や平等の語が、我黨の主義宣傳の爲に巧まれし秘密語なるを知れりや、汝等は今にして過激思想の傳播を恐るゝとも、汝等が從來否今日に於ても力説しつゝある自由平等の主張は、我が過激思想宣傳の先驅なるに氣付かざるや、今にして縦し氣付きたりとも、最早この思潮を回らすことを得ざるべし、故にこの思潮は我黨に依りて仕組まれたること公表するとも、戰は我黨の勝利に歸すべし、更に汝等自稱文明人に告げん、人生社會の構成は決して絶對の自由平等を許さず、故に我黨の天下となれば即時にこの主張を撤廢して着々我黨の所信を施行すべしと、賢明なる文明人はこの嘲弄に對して如何の自覺ありや、予は自由平等の語を排せず、然れども徳目中に在りて斷じて第一位に置くべきに非ず、佛典中にも自在の語は散見す、今の自由の語と同意なり、而も佛陀は是を慈悲報恩精進布施等の徳目以下に置けり、儒教に於ては仁義禮智を主要徳目とし、我が惟神道の教に於ては養正光宅忠孝養を以て主要徳目とす、自由平等を第一の徳目に

なすは隠れり。自由の語は抑壓に對し、平等の語は差別に對し、反抗的の徳目たるや明か也、その慈悲報恩と云ひ、仁義禮智と云ひ、養正光宅と云ふが如きは、何れも人心本具の靈性より開發し來れる、無上最勝の徳行なりと知るべし、今人切りに世界的思想に屈從して、過激派の爲に嘲弄せらる、之を眞に恥づべしと爲す。

◎佛教と民主國 佛教は民主國に對して如何の見解を有せるか、佛本行集經と題する五十卷の大經典あり、正大藏十四套八以下に收む、左の如く説けり、毘耶離城の主は上世より已來眞に是れ王種なるも、但だ彼の國人心剛強にして各々自ら用つて我は是れ王なりと稱し、憍慢熾盛放逸自高にして其の餘と共にらず、異類相雜はり、又尊卑大小の禮節なし、自ら言ふ我れは解せり、自ら言ふ我れは知れりと、復王ありと雖も肯て承事せず、自法を是なりと云つて他に從つて求めず是の故に汝今更に餘處の利利王種に我れ何れの家に生ずべきかを觀ぜよ一と、是れ釋尊降誕に際し、其國を撰定するに當りて、民主國なりし毘耶離國を否定せし語なり、毘耶離は維摩居士の統治せし國なり、釋尊は民主國を否定する理由とし、剛強、憍慢、放逸、禮節なく、王に仕へず、自法を是とし、教を奉ぜざる等の失を數へ給へり、今日西歐民主國にこの流弊ありや無しや、若しありとせば佛陀の觀察の鋭利なるを承認せんばあらず、今人動もすれば佛教を嘲罵す、何ぞ知らん自己の間短のみに欺かるゝことを。

◎現代の大患 現代文明の眞陷は多方面に暴露し、今にして

之を指摘するの要なし、就中この幾多の眞陷を誘引し來れる病源に就て見るに、これ實に道徳の規範を輕視し、宗教の信念を放棄したるに基因す、人生一日も道徳の規範なかるべからず、宗教の信念なかるべからず。今若し現代の崩壞を逃れんとならば萬事に先ちて大反省をこゝに致さるべからず。大聖釋迦曾て守護經中に説けり、この經文は正大藏十五套十に出づ、若し諸の人王斷常の見到執し、國政を治めしむとは是の處り有ること爲し一と、斷見とは靈の滅亡を主張するものにして即ち無宗教的思想なり、唯物觀的の文明なり、常見とは道徳上の善惡を無視し、生存の欲望のみに生きんとする低劣なる文明を云ふ、この斷常二見によりて即ち宗教の信念を放棄し、道徳の規範を無視するが如き社會に於て、人生の平和幸福を得んとするは、木に縁りて魚を求むるの類なるを警告せし聖訓なり、今日佛教を罵倒するに先ち、少なくともこの種の誠告を諸觀せよ、三世了達の大覺者は必ずや彼等に一種の大智見を與へたまはらん。

と傳ふ、此の如き學者一人を出すも實に學界の耻辱なり。而もこれ偶々學界不謹慎の一例に過ぎず、免職起訴を逃れたる學者に於ても、國民教化の個人の自由より重きを領せざるの輩多々存するものゝ如し、こゝにも亦その間短を暴露せり幸にこの一事件に依りて廣く學者の反省を促すを得ば、國民の幸慶ならん。

◎不謹慎の言論 今人言論の不謹慎なるは是れ亦時代病の一なり、人生は教化を維持するを以て最要の大事と爲す、個人の研究又は意見の發表は無論尊重すべきも、その事の國民教化を殘害するに於ては深く誠慎すべきなり、個人の自由の重んずべきことを知つて、國民教化の更に重んずべきを知らざるは、これ決して智者にあらず、近時帝大助教某クロボトキンの思想を紹介するに當りて、過激思想宣傳の嫌ありたる爲に、その職を免ぜられ、又新聞法に依りて起訴せらるべし

◎平和の喜悅 平和克復の大詔には、幾多至要の教化を示し給ふ、先づ第一に平和の喜悅を舉示し給へり、戰氛一掃平和克復の春を迎へしは、萬人齊しく喜悅すべき事なりとす、今日動もすれば國際間に帝國主義を夢み、又產業界に階級の争闘を力説す、これその謬見たるに於て一なり、國際の道義は相互の讓歩に依りて、平和を維持するに努むべきは論なき所何ぞ必ずしも國際聯盟を待たん、釋尊は増一阿含經(正大藏十三套の二)に説けり、古昔より諸王には此の常法あり、此の譯國の法ありと雖も、猶ほ相堪忍して相傷害せず一と、これ古昔より帝王の道は平和に存するや明かなり、而も世に戰禍の絶へざるは畢竟人心の欲望度を逸するより起る、故に永遠の平和を將來せんとするには、萬事に先つて人心の教化を盛んにすべし、釋尊涅槃の時に際して誠告して曰く「假使ひ鳥と鳥と、同じく共に一樹に棲むとも、猶ほ親しきこと兄弟の如くならん、爾して乃ましく永く涅槃せん、假使ひ蛇と鼠と狼と、同じく穴に處して遊ぶとも、相愛すること兄弟の如くならん、爾して乃ましく永く涅槃せん」(大涅槃經、正大藏八套ノ七八)と、相互の利害の相容れざるは人生なり、道を以て

人心を向上せしめ、利害以上に人心を支配する教化を建立するを要す、世に若し宗教道徳を輕視して、永遠の平和を説くものあらば、これ實に滑稽の張本なり。

◎友邦の協同 大詔中に第二に意識すべきは友邦の協同是なり、凡て人類の幸福は國家間の和協に存するは論なし、國家間の和協は相互に利害已上に道あるを明にし、各國民の之に循ふ心を強むるを要す、然るに近時の文明は氣傲り志卑しく、而して道の道たるを知らず、この風潮にして一轉せざる已上は、友邦の協同は決して永續し難かるべし、内我が國民の道念を陶冶すべきは勿論、廣く世界に向つて道の觀念を喚起すべし、人道正義を外交の辭令とし、國民各々利害に走するの國は、必ず友邦の協同を破るに至らん、先づ誠むべきは國民を教化して利害已上道念に生さしむるにあり。

◎國家の負荷 大詔中第三に意識すべきは國家の負荷の重大を加へし事なり、國際聯盟新に成るも、その精神を實現して永遠の平和を確保するには、聯盟各國互にその重を重んじ、斷じて強大を恃んで不義の行ひあるを容さず、自國の之を爲すべからざるは論なく、若し他邦の不義を逞ふせんとするあらば、正義の國と共に、その邪念を斷滅せしむるに努めざるべからず、我建國の聖旨實に茲に存し、我が立國の天職亦茲に在り、國民咸く正を養ふの心に生さん、嚴として世界に正義の法幢を翻すべし。

◎奮勵自強 大詔中第四に意識すべきは、國民の奮勵、自強に在り、我が國民近時怠惰の風を生じ、薄志の弊あり、宜し

重んじ、利害の相容れざるあるも、人道正義の觀念に由つてその衝突を緩和し、彼此相頼り自他相扶けて、世界の平和を確保せんことは是れなり、而も能くこの希望を満足すべきものは、世界文明の基礎たる教化の大本に依らざるべからず、世界教化の大本とは何、是れ東西文明の長所を採用して、その短所を放棄するに在り、東西文明の長短果して如何、是れ今人の洗面一回し來りて静思すべき所なり。

◎浮華戒飭 大詔中第七に意識すべきは浮華の流俗を嚴に改むべきと是れなり、近時浮華の俗都卑を席捲し、滔々汎濫眞に驚愕すべきものあり、新聞紙の報ずる所に依れば、中流家庭の婦人にして萬引の罪を犯して捕はるゝもの、東京大阪の兩市何れも毎月數十人に達し、その金額數百萬圓を下らずと云ふ、復以て如何に浮華虛榮の盛んなるかを推知すべし、釋尊は少欲知足を説いて精神的の法悦を教へ、浮華の俗の道念を損するの大なるを戒め、心行清淨を力説したまへり。今次の大詔煥發に就ての原首相の訓示を見るに、浮華の戒飭と思想の健全とを擧げて、特別の注意を促せり、是れ頗る機宜を得たるものと信ず、心ある國民は相戒めてこの流弊を矯正し、國民一齊に大反省の實を擧げんことを望んで止まず。

◎一心協力 大詔中第八に意識すべきは國民の一心協力是れなり、近時國民の間に政治的に、産業的に、將たその他の事に就て反抗争闘の風高まりつゝあり、是れ大いに考慮すべき所なり、我國の如き地位に在りて我國の如き實狀に立てるものは、唯だ國民の一心協力に倚りてのみ如上の大事を達成す

く勤勉不放逸の氣分を旺盛にし、又剛健果敢の氣象を涵養し大和民族の本性に復歸すべし、輕佻なる思想に流れ、軟文學に耽り、色食二欲の奴隸と爲りて、實質高邁の氣象を失へるは、眞に猛省すべき事なり、我が至尊陛下は曩に戊申詔書を下して、自強不息を教へ、淬勵の誠を盡すべきを示し給ひしが今復この大詔を拜す、眞に衷心より恐懼して奮勵自強の美風を發揚すべきなり。

◎隨時順應 大詔中第五に意識すべきは、隨時順應の教旨なり、今の時は抑も如何の時ぞ、世界を擧げて過去の大失態の因果は廻りて、何れの國も堅實なる平和を失へり、各國共に國家的大懺悔をなすべきの時なり、若し今尙近世文明の失脚に氣付かずして、その押し寄せたる流弊に追隨せんか、世界は擧げて修羅争闘の巷となり、畜生殘害の世とならん、故に天に謝し地に伏して大懺悔心を喚起し、先づ各人の心を倭せる愚劣なる邪念を刈除し、崇高なる正念を復歸し、各自の人格としては物質的の欲望を制御して精神的の光明を發揮し、社會としては相互に慈愛と恭敬とを交換して、温情春の如き人生を造出すべく努め、國家としては國民福利已上に正義人道の重んずべきを憲教とし、理想的國家を發達せしむべし。この意義に於て學說の不純なるは之を一新し、宗教の惡習は之を改たむべし、而も今の不純なる學說、宗教の惡習より來れる誤れる改造に對しては、嚴に之を拒否すべきなり。

◎萬國の公是 大詔中第六に意識すべきは、萬國の公是に循ふことは是れなり、萬國の公是とは何、曰く互に國家の存立をるを得べし、若し區々の言議に惑はされて一心協力の大事を逸せば、噬臍の悔立るに至らん、先帝陛下の御製に「千萬の民よ心を合せつゝ、國に力を盡せとぞ思ふ」と、深く聖旨の在る所を體し、一心協力の大事を忘るゝこと勿れ、日蓮大士曰く「異體同心なれば萬事を成し、同體異心なれば諸事協ふ事なしと申すは外典三千餘卷、内典五千餘卷に定りて候」と。

◎一心精進 現代の危機を救ふて文明の健全なる發達を期するには、必ずや人心教化の一事を更に大に尊重して、各方面に普及せしむるを要す、而して人心教化の事に當るべき佛教徒は、三世了達の大覺知見に導かれて輕佻淺膚の時弊を匡正すべし、教には實相の眞理あり、濟度の妙教あり、方便の攝化あり、復何の不足か之あらん、然れども佛教の今尙振はざるものあるは、是れ佛徒が一心精進の足らざるの致す所ならんか、今日に於て佛徒の自覺すべきは一に活動の旺盛を期するにあり、世尊最後の誠勅は如何、「諸法實相の義已に汝等が爲に説きつ、汝一心に精進し、當に放逸を離るべし」と、是れ實に佛徒の脊を服膺すべき所なり。

汝早く信仰の寸心を改めて速に實樂の一善に歸せよ、然れば則ち三界は皆佛國なり、佛國其れ甚よんや、十方は悉く寶土なり、寶土何んぞ壞れんや、國に衰微なく土に破壞なくんば身は是れ安全にして心は是れ安定ならん、此の副此の言信すべし崇むべし。

(立正安國論)

# 教化

## 佛教信仰の正統

本多 日生

### 一、緒言

今日佛教の信仰が、或は力無く、或は素れ、或は弱れて居ると云ふやうな點に就ては、心ある者の何れも慨然して措かざる所でありませぬが、併し佛教の正統に依つて信仰を立てることが出来るならば、決して今日のやうなものではない、最も理想的なる、現代の要求に副ふ所の、力もあり働きもあるものであるといふことを立證して見たいと考へるのであります。で廣く佛教の經典に基づいて證明を致せば、數限りなく結構な經典が存して居りますが、さう廣くお話しすることも時間が許しませんが、大體の所で明白な證據を挙げて、佛教の信仰は斯の如きものであるといふことを證據立てて見たいと思ふ。

無無論その宗派に依つて見解が違ふといふ議論もありませぬけれども、併ながら何れの宗派と雖も、佛の明白なる經文に違背することは出来なない。同じ經文でもこれは解釋の仕方であらうか

隠れて居る意味を開いて出るとか云ふやうな面倒なことになると、その中に斯う云ふことが這入つて居るとか這入つて居ないと云ふ見解の相違になるけれども、明白々々たる所の教訓に就ては、何人も反對の出来ないことであると思ふ。宗派の異同が起るといふやうなことは、寧ろ僅かな問題に於て起つて居ると思ふ、阿彌陀如來の願力に依るが宜からうとか、座禪するが宜からうとか、大日如來に依るが宜からうとか云ふやうな事柄は、決して大きな違ひでないであつて、阿彌陀如來に依るに於て座禪するに於て、佛の信仰の根本問題といふものは、さう云ふ所に依つて成れるものでなからうと思ふ。然らば如何なる事が大切なる點であるかと言へば、幾らでもさう云ふ問題以外に數へることが出来るのである。それ故に自分は明白なる佛教經典の示す所に基いて、佛教信仰の正統なる意味合が如何なるものであるかと云ふことを御紹介致し、更に進んで我々が奉獻して居る日蓮聖人の

教へられた信仰が、これ又全く日蓮聖人の獨想ではなくして、釋尊の經典に基いて立てられたものである。唯だ法華宗と言ふと、佛教の中の一つのお経を味方にして立つたと考へるけれども、さうではないので、大體は佛教の信仰の正統を發揮して居るのであるが、その正統が法華經に依つて頗る明白に證明されるのであつて、此方は法華經に依つた向ふは何經に依つたと云ふやうな、同じ佛教中の互ひに一部分を捉へて争ふのでは無くして、日蓮聖人の主張する信仰が佛教信仰の全體であつて、その正統であるといふことを、私は證明して見たいと思ふのである。

### 一、醒めたる信仰

それで第一に佛教信仰の性質に就て考ふべきことは、醒めたる信仰といふ點であらうと思ふ。醒めたる信仰とは如何なる意味かと申せば、この人生に關しての考へが一段深い所に這入つて其處から起る信仰といふのであつて、醒めたる信仰といふのは人生の皮相なる生活、他の言葉で以て言へば物質的生活、墮落の生活といふものに酔はらつて居る者が即ち醒めざるの生活である。醒めたる生活といふのは、この人生の現在生活を捨てはせぬけれども、唯だ目前の利害のみを逐うて一生を終るといふことは、洵に果敢なきものである、唯だ目前の慾望に囚はれて終れば、彼も一時は一時、過去つて見れば

總べて夢であつたかと云ふやうなことで、人生といふものは烟りの如きものになつてしまふ。その事に熱中して居る時、その事に眼の眩んで居る時は、非常に大きな問題であるかの如く思ふけれども、それが済んでしまふと云ふと、あんな事に力を入れてワイ、言つたのは詰らなかつたといふ事になる。諸君の過去を追懐しても、幾度か怒り、幾度か悲しみ、幾度か笑つたであらうけれども、それが今日記憶に残つて居る程の腹立といふものは幾らもない、百遍も二百遍も腹立てたらうけれども、それが「何時まで経つても尤な怒であつた、あの時腹立てたのは、吾身ながらも大きに尤だ」と云ふやうな事を記憶から喚起さうとすると、殆ど無のである、然らば一つも怒らずに來たかと云ふと中々さうではない、數へ切れない程度々怒つて居る、それが時間の経過と共に意氣無く消える。と云ふのは、その時は尤のやうであつても、能く分別して見れば大した事でも無かつたといふことが證明されるのである。悲しい事もやはりその通りで、その日々に打つかることで悲しんで行くけれども、それはやはり時間の経過と共に薄らいで去つてしまふと云ふのは、その悲しむべき事の實質が、夢に等しいことが多いからであります。さればとて人事を無闇に捨てしまへと云ふ譯にはいかんけれども、左様な事が一方にはある、がそれはその時々に先づ程よく捌いて行つて、更に變化を受けない根抵

深き立場に於て自分の心が導かれ、導かれて、人間生活を通じて、終ひ迄行つても意義ある生活を遂げた、價値多き生活を遂げたといふことにならなければ、詰らぬではないかと云ふことが、宗教の信仰に這入る根本の思想である。その觀念が起らずして、唯だ同じやうに醉はらつて行くといふならば、宗教などに來ないで、やはり雜然たるこの穢れたる世に徘徊して居りさへすればそれで宜いのである。故に苟くも宗教的の信仰に這入るといふに就ては、この人生觀に一段深みを味ふと云ふことが無くてはならぬ。

一般生活といふのはどういふのかと言へば、多くは先づ本能に導かれて行くのであるから、旨い物を食ひたいとか、美しい着物を着たいとか遊んで居りたいとか云ふやうな事である。非常に深山の慾望を持つて居るやうだけれども、その慾望といふものは所謂五慾と言つて、舌の上の旨い物を載せたい、眼に美しい色を見たいと云ふやうな風に、唯だ感覺の喜びを求めて居るに過ぎないのである。それを段々約めて行けば、一種の感覺的生活で、五慾の生活は一つの感覺の生活である。この五慾の感覺に依つて樂みを得やうと思つて居るのであるから、その感覺を除つてしまへば何も無いのである。旨い物を食ひたいといふことは、舌といふ一つの感覺があるから、これは少しも精神の問題ではない。精神が要求して居ると思ふのはボンヤリし

た考へであるけれども、旨い物を食ひたいと云ふその食しん坊とか、卑しん坊とか云ふ人間は何も、魂まで卑しん坊ではない、胃袋の組織が早く腹が減るやうに出來て居るとか、或は胃擴張を起して、そんなに減つて居なくても減つたやうに感ずるとか云ふ、胃袋の組織の問題であつて、あの人間は中々行儀がよい、大して食ひたく思はぬと言つても、それは消化力が悪い爲めに腹が減らぬと云ふやうなことである。左様な譯であるから、さう云ふ感覺といふことを基礎にして考へて行く事は、薩張り値打の問題である。精神の問題は自分の心に喜びを感じることである。その喜びは、舌の上に旨い物を載せて嬉しい、牡丹餅を食はして貰つたから嬉しいと云ふやうなことは、心の喜びとは云ふても舌の喜びのお接待に心が引ついて行き居るので心の喜びではない。心の喜びと云ふものは、善い事をしたと云ふやうな事、自分が人の世話をして、その人が立派になつたとか、子供を養育して立派な息子が出來たとか、世の中の爲めに盡してそれが世を利益したとか、國家に貢獻してそれに依つて國が榮えたとか、或は教の爲めに盡して人の心を救つたと云ふやうな事は、これは心の喜びで、舌の喜びでもなければ身體の喜びでもない、精神の歡喜である。さう云ふ精神の歡喜になると、初めてこれが價値のあるもので、又滅びないものである。

一般生活、醒めざる生活といふものは、心の喜びといふものを、實は持つて居らないのである。低い方を考へたら直ぐ分かる、動物を御覽なさい、動物には心の喜びといふものは殆ど無い、彼等は鬚の頭を貰ふとか、或はグーンと寝て居るとか、或は交尾するとか云ふやうな事以外に、精神の上には何の喜びをも持たぬ者である。そこで人間でも低い人間は、それと頗るよく似て居る、子供の時代に於ては精神の喜びといふものは殆ど無い、乳を飲まして貰ふとか、煎餅を貰ふとか云ふやうな事より他、少しも喜びを感じない。大きくなつても精神の能力の發達せぬ人間は、物を貰ふといふことでなければ喜ばない、細民などの生活状態に就て考へたならば明かなことで、善い事をするとか、善い話をすると言つても、彼等は出て来ない、「さあ此處にある煎餅をやらうか」といふと、パツと起きて飛んで来る。これが世の中には非常に多い、詰りパンとか煎餅とか牡丹餅とか云ふ問題になれば、パツと起きて飛んで来てブン撲り合ひをする。精神の問題といふことになると、「そんなものは古い」と言つて之を擯るといふことは、人間で言へば子供の生活、動物の生活に段々墮落して来るものである。高等なる人間生活には、どうしても精神的喜びを加へて行かなければならぬ。

故に宗教の信仰に這入つた者は、現代文明のこの状態に對しては、如何なる宗教でも協力一致してこれに反對すべきであつて、宗教の共同の敵となつて居るものが現代の文明であると私は信するのである。今日の文明の思しき傾向に對して、之を愾然しないやうな宗教は、所謂醒めざるの信仰である。若し日蓮主義者の中にやへり現代の墮落の傾向と同じやうになつて、而かも南無妙法蓮華經を言うて居るといふ者があつたらば、それはまるで猿が冠を着て居るやうな話で、墮落して人生の穢れの中に流れて行つて、唯だ聲ばかり南無妙法蓮華經と言つたり、ノーマクサンマングーと言つたり、アーメンと言つたり、活動寫眞を見たり、賭博を打つたりするもので、それは皆同じ程度のものである。唯だその言ひ草が違ふだけで、精神の傾向として皆墮落して居るものである。苟も如何なる宗教でも宗教に這入つたとなれば、此墮落する傾向を愾然して、是はいかぬ、どうしても人は精神の喜びを加へたる文明を作らなければならぬ。それに反對するものは政治であらうが、産業であらうが、社會運動であらうが、皆我が敵である」といふことを標榜するに於て、そこに初めて宗教の本領が立つのである。海に明白なものである。これが分らん位ならば、夜も晝も分らん人間である。宗教は其處に打立てられぬものである。而してそれが決して現代の物質生活を呪ふものではなくして、その精神の喜びを與へること、初めてこの社會の物質方面も調和を保つて行くのである。其處に我々の精神が

て、此處から逃げ出す、さうして婆羅門の教に這入つて、山の中に行き、人生の實際生活と懸け離れてしまつて、さうして自分のみ行ひ済まし、或は形式的なる宗教の儀禮を以て、自分の心に香を盛つてそれに火を點けて焚くとか、或は寒中河に身を投ずるとか云ふやうな難行苦行をやる。さう云ふことを以て形の上には宗教の儀式をやつて居るけれども、精神に於て醒めざるが故に、身體は苦しめるが精神の修養が積めない、水を浴びながらやはり旨い物を食ひたいと思ひ、或は人生の名利を逐うて争ふといふ觀念が精神を襲うて来て、婆羅門の旗の中には盛んに争ひがある。形は宗教であるけれども、それは形式のみ衣を着て水を浴びたり香を焚いたりするので、精神はやはり怨みと争ひと闘ひと罪惡に充ちて居るものである。一方は表面から非常に墮落して居る、一方は行ひ済ましたやうであるけれども、精神の内部に於ては同じ怨憎憎嫉の生活で、そこに苦しみがあり、憤みがあり、罪があるといふ事を釋迦如來は説かれた。さうして一般世人の生活と、誤れる宗教の生活を矯正すべく運動を起したのが、佛教の信仰の出發點である。

態は即ちそれである、時は三千年隔つて居るけれども、生活の方式に於ては釋尊が最初の説法に於て攻撃したる凡夫の生活である。今一方宗教生活の缺點を指摘したることは、今日は婆羅門教ではなくして、佛教といふ名前を以つて居つて、色々の名前はあつたが、やはり形式が主となつて、形は行ひ済ましてお経を讀んだり何かするけれども、その宗教の中に「俺の方が上に坐る」とか、「貴様が上に坐つたのがいけぬ」とか、と云ふやうな事を言つて争ふのは、やはり婆羅門の旗が、水を浴びながら人生の賤しき欲望に悶へ苦しんだと釋迦が言ふのと、同じ状態になつて居るのである。形式は幾ら變つた所が、精神の醒めざるに於ては一つである。神聖なる佛教は「何宗ぢや」「かに宗ぢや」といふやうな氣の利いた名前を附けるよりも、その宗教に居る所の僧侶なり信者なりが、精神的に人生觀の上に於て眞正に醒めるといふ事を條件にせぬ限りには、佛教の門に這入ることは出来まいと思ふ。今日の有様では大きな宗門であつても大きな本山であつても、その宗派、本山の總てが眞正な佛教の門の外に立てられて居るのではなからうか。

斯う云ふ意味は釋尊の教を見ると、如何にもあり／＼と現はれて居る、これは一箇所二箇所ではない、最初の説法がさうであつて、終りに至つて涅槃の時に訓戒を與へる時その點を説かれて居る。我が教は形式の上に立てたもので

引締められ、世の中の罪惡が引締められ、さうして平和なる人生が組立てられる、相互の物質的の幸福も圓滿に發達する次第であつて、今のやうに精神の方面を全滅してかゝつた時には、即ち掠奪、争闘、燒打、人殺しといふことに流れて行くのである。

故に釋迦如來の教の根本に歸つて考へて見ると、先づこの人生の醒めざる生活を戒しめ、さうして精神の喜びを加へて、本當の精神の力に依つて人生を光あるものにしやうと云ふ決心が佛教信仰の出發點であります。

それは一番最初釋迦が成道の後一週間、當時印度の文明殊に思想問題の中心であつた婆羅門國に行つて、最初の説法を試みた時、如何なる事を提へて来たかと云ふと、即ちこの人間の生活方式に於て、二つの誤つた傾向があると云ふ事を説かれた。一つは凡夫の生活である、凡夫の生活とは今申す醒めざる生活であつて、肉慾を逐うて、金が大事だ、パンが大事だといふ、この今日の人が叫んで居るが如き状態、之を凡夫の生活と云ふ。其處には却つて怨み、憎しみ、争ひ、闘ひ、罪惡といふものが漲ることになる。互ひに我々の精神であるから、其處に怨みが結ばれ、憎しみが動き、戦ひが起り、さうして相殺戮する所の文明が起つて、決して神聖なる幸福はその中から現はれて来ない。もう一つの誤つた生活は、この人生の穢れを眺めて

の廻つて居る家の中で玩具を持つて遊んで居る子供と等しい者である、如何にも憫れむべきものであるといふ觀念を明かにして、初めて佛教の門の中に這入つて一年生と成ることが出来るのである。それが同じ様にやはり仲間になつて、その玩具を此方によこせ、イヤ俺のものだ、と言つて喧嘩するならば、大僧正であらうが大信者であらうが、やはり火事の中に玩具に囚はれて居る未だ醒めざる者であると言はなければならぬ。此處から出發せねば宗教には力が無いであらう。故に三界火宅の譬の所に於て、この子供が心を奪はれて居る所に父が戻つて、汝等が遊んで居るこの家の中には火が廻つて居る、早く逃れ出なければならぬと言つて忠告したけれども、少しも気がつかないで遊んで居る不覺、不知、不驚、不怖とお經には説いてある。火が廻つて居ると言つても何とも思はない、夢中でやつて居る、少しもそれに依つて驚いて、「あ、これは大變だ」といふ考へを起さない、其處で能く味はなければならぬ、唯だ何處も説教を聴いたり、お經を讀んで見た所が何にもならぬ。少しは一般人生に對して靜かに考へて、人生は浮か／＼と一生を送ればそれ限りのものであるが、折角人間に生れたものであるから、この生涯はどう云ふ意味で送るべきかといふ事を、一つ胸に手を置いて考へなければならぬ。どうしたら金が儲かるだらうと云ふことを考へる前に、「人生は如何に生くべきか」といふ事を

考へなければならぬ。労働問題と言つて食ふ食へぬといふことを喧ましく言ふが、彼等は曰く「精神の問題などは後との後とである、どうでも宜い、先づ食ふ事を考へなければならぬ」と言ふけれども、吾々の立場、即ち釋尊の立場から言へば、汝等は未だ一日位水を飲んで居つても死にはせん、食へん／＼と言ふが、少しは瘠せるだらうけれども生命は大丈夫だ、腹が減つても辛抱して先づ人生を考へよ、その考へが附いてから緩り飯を食つて宜しい、さうすれば今迄瘠せた奴が又癒つて来る、さもなくて食ふ事はかりやつて居ると、その爲めに却つて精神の悶へを作つて、怨恨憎嫉を起して、他人に成るから、唯だ食ふ事をばかり考へたんで人生は駄目ぢや」といふ事を釋迦如來は説いて居らるゝのである。

は、如何にして明日のパンを得べきかと考へて居る、一方自働車に乗つて飛び廻つて居る者は明日は如何なる御馳走を食ふべきかと云ふことを考へて居る。やはり食ふといふ事を考へて居る點に於ては一つである、如何にしてパンを得べきかと云ふのと、如何なる御馳走を食ふべきかと云ふことは、何も違ひはない、其處に至つたらば、實は憐れなる文明、貧弱なる文明、低級なる文明と謂はなければならぬ。食ふ事の一遍や二遍位は忘れても宜い、弱弱を煮て呉れたら茹蕪を食つて居れば宜い、大根が出たら大根、刺身が出たら刺身それで深山だ、必しも一遍々々何を食はせるかと言つて騒いで、茹蕪ではいかんから刺身にしろと言つて注文をする事はない、何なりとも食へる物を煮て来た以上は喜んで味ひ、何を食つても皆旨いと云ふやうに、自分の身體を作つたら宜い。自分の舌の修養といふ事が非常に大事である、唯だ外物に促されて、良い物でなければ旨く感じないといふやうなボケた舌ではいかぬ、それは劣等な舌である。パンを持つて来てても水を持つて来てても、それを旨いと感ずるだけに自分の精神を作つたらどうだ。それは不思議なもので、確かにさう行くのである。自分は近頃さう云ふ事を修養して見たが、食つて旨くないと云ふのは、食物が悪いのではない、此方の舌が悪いのである。さう思つて見ると同じ味噌汁でも、少々味噌が惡くなつて居つても、ズツと味が能く出て来る、

それを精神修養の足らない者が食ふと、「この味噌汁は旨くない、鹽節が足りないぢやないか」と云ふやうに段々惡くなる。唯だ喜びを外物のみに求めるといふ現代の文明の方式が、禍ひの本であらうと思ふ。自らの喜びを開發する事に努めれば、餘程簡単な生活が開かれて来るのである。

圓ともなく、持つて歸る事の出来ぬ程の錢になつた。それから食ひたい物、飲みたい物を思ふ存分買入れて、大きな宅宅も出来、自動車も買入れたといふやうな譯で、非常に喜んだといふ事が書いてある。この珠とは何であるかと云ふと、宗教の信仰を指したのである。人が宗教の信仰に活きた時に於ては、そんなに外から喧ましく言はないでも、自分の懐の中から、非常な澤山の値打ある物が現はれて来ると云ふのである。この精神の方から喜びを開發して行く力を全滅しては、到底人生の文明は駄目である。勿論唯だ精神のみに於て生きているといふことは極端である、精神ばかり發達しても、十日も二十日も飯食はなければ弱つてしまふけれども、少々位まづいとかが旨いと云ふ觀念は超越することが出来ぬ。今日のやうに旨い上にも旨い物と言つて、巻煙草でも、一本五錢、十錢、三十錢、五十錢、貳圓と言ふやうに、段々高い巻煙草をブカ／＼吹かす、或は食料の方でも一食二十錢、三十錢、五圓、貳拾圓といふやうな工合に、唯だ高い物を食つて喜んで居る、それは誠に詰んだことである。衣服にした所がさうである、一枚の衣服が三圓、五圓、三十圓、五十圓、百圓、五百圓と云ふやうになつて、さう云ふ物を着て唯だ威張つて居る。さうして三十圓の衣服を着たより五百圓の衣服を着た方が宜いといふ爲めに人生が墮落するといふは、大いに考へなければならぬことであらうと思ふ。裸で居れといふ

ことは極端である、食はずに居れといふことは極端である、食ひもし、着もしなければならぬけれども、着る物も三十圓の物を五百圓にする一飯五十錢のを五圓にするの爲めに、人生が墮落に陥つて居るといふことは、富豪の考へが悪いが、誰の考へが悪いか知らぬけれども、兎に角世の中が今日墮つて居るといふことは明白である。然かも左様にしてそれが幸福であるかと云へば、少しも幸福なるものではない、餘り高い衣服を着て居つたならば、一寸泥がかつても百圓の損がいつたといふことになつて、始終その事の爲めに非常な注意を拂はなければならぬ、一寸油断すれば大損害を受ける。それは良い衣服を着て御覽なさい、それだけ氣をつかふ、電車に乗つても汚れると大變だと思ふから、電車にも乗れない、自動車に乗つて行かなければならぬ。又自動車に乗つても餘り早く走れるから危ないと言つて氣をつかふ、人の子供でも轢き殺したら大變だと云ふことになつて、非常に苦みが多くなる。餘りに今の歐米人がやるやうに、物質の文明を極度に進めて行くといふ考へはどうしても引下けて、少しは分に安んじて、慾望を少くして、足る事を知るといふ意味に人生を引戻さんければならぬ。唯だ人生を厭世的に斷食するとか云ふやうな極端な事はいかぬが、相當な物を食ひさへしたならば、其處に分に満足することを考へなければならぬ、それが釋尊の教の御精神であります。

其處で又法華經には酒に酔はらつて寢て居る者の話が出て居る、それを見て友人が可哀さうに思つて、自分は是から他國に行かなければならぬが、此奴が眼が醒めた時分に貧乏して困つて居つては可哀さうだからと言つて、値打のある珠をその酔はらひの袂に入れて、眼が醒めてもこの珠を決から出して錢に替へれば、何萬圓といふ錢に替るからその錢を以て買ひたい物を買へば困るまいと云ふので、價値高き珠を入れて去つた。所が酔へる者は、眼は醒めたけれども珠を發見する事を知らなかつた、肉體の眼は醒めたけれども、精神の眼が醒めないから、乞食のやうな状態になつて徘徊して居つた。其處に友人が歸つて来て、「何でお前は乞食をして居るか、さう云ふ事になつてはいかぬと思つたから、自分が去るに望んで珠を興へて行つたのである、袂の中に手を突込んで見よ、さうか」と言つて手を入れて見た所が、その珠が取つたすしてその儘あつた、それを兩替屋に持つて行つて錢に替へて貰へ」と言ふので、さうした所が、百圓が貳百圓位であると思つたら、何十萬

圓ともなく、持つて歸る事の出来ぬ程の錢になつた。それから食ひたい物、飲みたい物を思ふ存分買入れて、大きな宅宅も出来、自動車も買入れたといふやうな譯で、非常に喜んだといふ事が書いてある。この珠とは何であるかと云ふと、宗教の信仰を指したのである。人が宗教の信仰に活きた時に於ては、そんなに外から喧ましく言はないでも、自分の懐の中から、非常な澤山の値打ある物が現はれて来ると云ふのである。この精神の方から喜びを開發して行く力を全滅しては、到底人生の文明は駄目である。勿論唯だ精神のみに於て生きているといふことは極端である、精神ばかり發達しても、十日も二十日も飯食はなければ弱つてしまふけれども、少々位まづいとかが旨いと云ふ觀念は超越することが出来ぬ。今日のやうに旨い上にも旨い物と言つて、巻煙草でも、一本五錢、十錢、三十錢、五十錢、貳圓と言ふやうに、段々高い巻煙草をブカ／＼吹かす、或は食料の方でも一食二十錢、三十錢、五圓、貳拾圓といふやうな工合に、唯だ高い物を食つて喜んで居る、それは誠に詰んだことである。衣服にした所がさうである、一枚の衣服が三圓、五圓、三十圓、五十圓、百圓、五百圓と云ふやうになつて、さう云ふ物を着て唯だ威張つて居る。さうして三十圓の衣服を着たより五百圓の衣服を着た方が宜いといふ爲めに人生が墮落するといふは、大いに考へなければならぬことであらうと思ふ。裸で居れといふ

ことは極端である、食はずに居れといふことは極端である、食ひもし、着もしなければならぬけれども、着る物も三十圓の物を五百圓にする一飯五十錢のを五圓にするの爲めに、人生が墮落に陥つて居るといふことは、富豪の考へが悪いが、誰の考へが悪いか知らぬけれども、兎に角世の中が今日墮つて居るといふことは明白である。然かも左様にしてそれが幸福であるかと云へば、少しも幸福なるものではない、餘り高い衣服を着て居つたならば、一寸泥がかつても百圓の損がいつたといふことになつて、始終その事の爲めに非常な注意を拂はなければならぬ、一寸油断すれば大損害を受ける。それは良い衣服を着て御覽なさい、それだけ氣をつかふ、電車に乗つても汚れると大變だと思ふから、電車にも乗れない、自動車に乗つて行かなければならぬ。又自動車に乗つても餘り早く走れるから危ないと言つて氣をつかふ、人の子供でも轢き殺したら大變だと云ふことになつて、非常に苦みが多くなる。餘りに今の歐米人がやるやうに、物質の文明を極度に進めて行くといふ考へはどうしても引下けて、少しは分に安んじて、慾望を少くして、足る事を知るといふ意味に人生を引戻さんければならぬ。唯だ人生を厭世的に斷食するとか云ふやうな極端な事はいかぬが、相當な物を食ひさへしたならば、其處に分に満足することを考へなければならぬ、それが釋尊の教の御精神であります。

其處で佛の信仰としては、さういふ點を決心すること、吾々は初めから謂はれ無しに難行苦行の生活をするのはいけない。又凡夫の如くに、唯だ面前の利慾を遂うて争ひを重ねるといふやうな生活もいかに。精神の生活を重んじて、それに伴ふ物質の慾望を充たして、それを附けたりのものにして、精神を本位として物質の生活を伴はしめて、一生を送るといふことを決心することである。何でもない事であるけれども、それが鞏固な意味に於て決心せられて、この信念は決して破れないといふのが、佛教徒の信念決定といふものであらうと思ふ。さうするとこの意味は或る宗旨の如くに、餘りに人生を悲観して、厭世的に考へるといふことでは、やはり人生を唯だ厭ふといふことになつて、現在の生活が其處に開けて来ない。それは醒めざる生活といふより、寧ろ失望したる生活である。左様な厭世の生活、悲觀の生活といふものはいけない、酔ばらつて居るといふものもいかにけれども、悲觀の生活は婆羅門の生活である。釋尊の生活は現在には酔はぬが、併し現在に醒めて、現在に力強く進んで行く生活を教へられて居るのである。

其處で日蓮聖人の御一代を見ると、頗る能くその點が現はれて居る。日蓮聖人は迫害の中に居たけれども、この人生に喜びを持つて、法悦の生活を十分味はつて居られた。佐渡ヶ島に流された時分にも、一間四面の辻堂の中に疊も無く布團も無く、實に今日の細民部落の生活よりもつと苛い生活で、鏡を着て明かして御座る生活であつたけれども、而かも日本國に於て日蓮位富める者は無い、日蓮位喜び身に餘る者も無いと言はれたのは、その簡易なる生活の中に精神力の方から非常な喜びを加へて、この人生を見られたのである。「こんな島に凍へて居る位ならば、いつそ死んだが宜からう」とは言はれない。「日蓮位幸福なる者は無い」と言はれた所に、吾々の模範があると思ふ。それから又身延の生活に於ても、非常に朗らかな生活を營んで居られた。それは「身延記」にあるが如くに、この身延山の棲家ほど愉快な所は無い、僅かな紅葉が竹を割つて居るのを見ても、寛と言つた所が竹を割つて水がチヨロ／＼流れて居るだけであるが、それに紅葉が映つて居るのを見て非常に喜ばれて、

でになるだらうと云ふやうに言はれた。而かも實際はどうかと云へば、掌ばかりの所を平けて、其處に堂を建てたので、今尚ほ身延山は随分交通不便な所でありませうけれども、精神の喜びを加へるから「千早振る神も恵みを垂れて天くだりますらん」紅葉の葉が鏡に映つては「龍田の河の水もかくやと疑はれぬ」といふやうな、精神の喜びをお話しになつて居る、其處がよい所である、この現在生活に酔はらばないで、精神力を以て現實を非常に幸福な生活にして、精神力を加へてこの人生の不幸、人生の險惡を除いて、此處に春風駘蕩たる生活を送るといふのが宗教である。それが出来るやうになれば、この位結構なことではない、これが實に人生を救済する力である。唯だ物質が一パイになつて来なければ喜ばぬといふことになると、何時まで経つても満足の出來るものではない。今日の細民はそれである。であるから如何に社會政策を行つても到底満足は得られない、如何に偉大な政治家が出て普通選挙を行つた所が、この細民は無くなるものではない、彼等は普通選挙で行つたならば、忽ち牡丹餅が飛んで来ると思つて居らうが、幾ら普通選挙をやつたからと云つても、細民は益々殖えるものである。それが救へるならば宜しいが、總ての細民を救済して牡丹餅も食はせ、絹布團も着せるといふやうな工合に行くならば宜いけれども、施しと言つて見た所が僅かに米を廉賣するとか、餅を五拾錢

やると言つた所が、一日食へば無くなつてしまふ、その翌日からは以前の狀態である。それはやらんよりはましだけれども、左様な事のみを以て人生が圓滿になるといふ譯には逆も行かない。であるから如何に物質には缺乏したる狀態でも、精神力に於て満足を得なければならぬと言つて、人を導くならば、唯だ一人の宗教家の教化に依つても、五百人も千人も人間が精神の喜びの方から非常に幸福を味ふ人に成り得るのである。これは限りある物質を與へるのではない、限りなき精神力を開発するのであるから、一人の僧侶の力に依つても千人でも二千人でも精神生活を營ましむることが出来る。偉大なる感化力を持つて居る人が出るならば、その一人の力によりて何萬人をも喜びの生活に移すことが出来る。

龍宮の寶を奪らうといふ事を發願した。その話が非常に面白い、先づ龍太子が龍の貝を以て海に行つた、龍の貝と書いてあるのが面白いと思ふ、大きな蛤の貝でも持つて行けば早くかい干せる譯だけれども、龍の貝を持つて海の水を干しかけた。所が龍宮の神が見て笑つて云ふには「大海の水をかい干すに龍の貝を以てやつたならば、百年やつても二百年やつても、お前の壽命が無くなつても海の水はかい干せるものではない、馬鹿な事をするではないか」と言つた。併し龍太子は少しも撓む所なく、「なに必ずかい干して見せる、我が誓願の力偉大なるが故に、大海の水をかい干して見せる」と言つた。所がその言葉に諸天神が感應して、それ程固い決心なれば一つ助けてやらうと云ふので帝釋天を初めとして澤山の諸天神が一度に來つて贊成を表して「手傳はう」と云ふので、神通の力を以て象が水を呑むやうに、大海の水をグーツと腹一パイ吸うては外の世界に移し、吸うては移した。何しろ大きな筒でかい干すよりもえらい勢ひでやつたものであるから、瞬く間に水が減つて龍宮の城の屋根がチヨロ／＼見え出した。そら屋根が見えたぞ」と云ふ中に底の方に行くとき水が少くないものであるから、見居る間に水が減つて来て、龍宮では大騒ぎが始つた。「どうも考へて見ると龍太子の誓願力は偉大なものだ、天の神様まで贊成された以上は仕方が無い、寶を差出したら宜からう」と云

ふ決議をして、龍宮の總ての寶を龍太子に渡した。其處で龍太子はそれを取つて思ふ存分に貧民に施したと云ふ事がある。これは釋尊の菩薩行の中に必ず出て來る話である、この話には非常な意味があるので、平凡に考へると、「幾ら龍宮の寶でも終ひには無くなるぢやないか」と云ふけれども、龍宮の寶とは何であるかと言へば、今の所謂宗教の信仰である、之を與へたならば如何なる人間も無限の盡きない喜びがあるから、龍宮界から得て來たといふことは一つの譬に寄せたものであつて、釋尊が永年の菩薩行に依つて偉大なる佛の教を聞いて、この佛の法の寶といふものから信仰を導き、人の心に満足を與へるならば、無限の満足を與へることが出来るといふ事を説いたのである。その點が非常に宜いと思ふので、この意味を政治家、社會改良家すべてが自覺しなければならぬ。最近歐米を視察して歸つた或る識見家の議論に依れば、今日の險惡なる社會状態を救済する方法は唯だ二つあるのみ、物質的には總ての者に住宅を與へて、彼等をして浮浪生活の者無からしむることが一つ、今一つは精神の問題で、如何なる下層に居る者にも宗教の信念を復活せしむること、これに依つて今日の弊害が救はれる、この住宅問題と宗教の復活運動といふ二つを除いては、この境はれ行く社會を救ふことが出来ないといふのが、最も新しき、最も識見ある者の結論である。其處まで來ない者は中

釋尊が過去に菩薩行の時分に、施しの行をしたことがある。龍太子と言つた時に、自分の持つて居つた物は皆施し切つたけれども、中々細民が減じない。金銀財寶は無量の事、自分の着て居る衣服まで一切施してしまつたけれどもそれも直ぐに無くなつてしまつて、憫れな者が一パイ居る。これでは如何に施しても施しきれないが、何か無限の寶を得てこれに施した、聞く所に依れば龍宮界には様々の値打ある寶があるといふから、一つ龍宮界を襲つて龍宮から寶を皆奪ひ上げて来て、この憫れなる細民を救はうといふので、海の水をかい干して、

龍宮の寶を奪らうといふ事を發願した。その話が非常に面白い、先づ龍太子が龍の貝を以て海に行つた、龍の貝と書いてあるのが面白いと思ふ、大きな蛤の貝でも持つて行けば早くかい干せる譯だけれども、龍の貝を持つて海の水を干しかけた。所が龍宮の神が見て笑つて云ふには「大海の水をかい干すに龍の貝を以てやつたならば、百年やつても二百年やつても、お前の壽命が無くなつても海の水はかい干せるものではない、馬鹿な事をするではないか」と言つた。併し龍太子は少しも撓む所なく、「なに必ずかい干して見せる、我が誓願の力偉大なるが故に、大海の水をかい干して見せる」と言つた。所がその言葉に諸天神が感應して、それ程固い決心なれば一つ助けてやらうと云ふので帝釋天を初めとして澤山の諸天神が一度に來つて贊成を表して「手傳はう」と云ふので、神通の力を以て象が水を呑むやうに、大海の水をグーツと腹一パイ吸うては外の世界に移し、吸うては移した。何しろ大きな筒でかい干すよりもえらい勢ひでやつたものであるから、瞬く間に水が減つて龍宮の城の屋根がチヨロ／＼見え出した。そら屋根が見えたぞ」と云ふ中に底の方に行くとき水が少くないものであるから、見居る間に水が減つて来て、龍宮では大騒ぎが始つた。「どうも考へて見ると龍太子の誓願力は偉大なものだ、天の神様まで贊成された以上は仕方が無い、寶を差出したら宜からう」と云

ふ決議をして、龍宮の總ての寶を龍太子に渡した。其處で龍太子はそれを取つて思ふ存分に貧民に施したと云ふ事がある。これは釋尊の菩薩行の中に必ず出て來る話である、この話には非常な意味があるので、平凡に考へると、「幾ら龍宮の寶でも終ひには無くなるぢやないか」と云ふけれども、龍宮の寶とは何であるかと言へば、今の所謂宗教の信仰である、之を與へたならば如何なる人間も無限の盡きない喜びがあるから、龍宮界から得て來たといふことは一つの譬に寄せたものであつて、釋尊が永年の菩薩行に依つて偉大なる佛の教を聞いて、この佛の法の寶といふものから信仰を導き、人の心に満足を與へるならば、無限の満足を與へることが出来るといふ事を説いたのである。その點が非常に宜いと思ふので、この意味を政治家、社會改良家すべてが自覺しなければならぬ。最近歐米を視察して歸つた或る識見家の議論に依れば、今日の險惡なる社會状態を救済する方法は唯だ二つあるのみ、物質的には總ての者に住宅を與へて、彼等をして浮浪生活の者無からしむることが一つ、今一つは精神の問題で、如何なる下層に居る者にも宗教の信念を復活せしむること、これに依つて今日の弊害が救はれる、この住宅問題と宗教の復活運動といふ二つを除いては、この境はれ行く社會を救ふことが出来ないといふのが、最も新しき、最も識見ある者の結論である。其處まで來ない者は中



古であり、不徹底である、今にしてパンの問題を叫んで居る者が新しいと云ふやうなのは、非常にもその人の識見が後れて居るのである。最早やパンの問題は叫ばなくても宜いのである。人は今日今申すやうな精神の力を復活しなければあらゆる方面の弊害を除く事が出来ないといふことになつて居る。

共に於て日蓮聖人の爲さつた事も、やはりその通りであらうと思ふので、聖人の人生観は、色々生れかはり死にかはりするその中には、或は國王に生れて精勢を恣にしたこともあらう或は美人に生れて多くの男子に敬はれたこともあらうけれども、それも一時これも一時、唯だ人生の精勢名利に酔うて居れば、美人と生れて小野小町となつて朽ち果るも、或は醜婦となつて朽ち果るも、その年限を経過したならば同じものではないか。北條義時、泰時と言つて榮えたのも、その時は一時榮えて居たけれども、過去つて見れば逆賊北條と云はれるのであるから何にもならぬ。唯だ人生一時の夢の喜びであるといふ事を日蓮聖人は繰返して考へられた或る時は嫌と生れて遂に遂に心配した或は應になつて小禽を追かけてギョツと喰つた事もあらうけれども、その小禽の苦勞の生活もそれ限りの事である、應となつて思ふ存分小禽を咬へて喜んだのも、その時だけのことである。左様にして或は悲み或は喜びしたけれども根柢無き喜びと悲みとに依つて生涯を暮るとい

ふ事は詰らぬ、もつと深き根柢より人間の喜びを打立てんければならぬと云ふのが、日蓮聖人の信仰である。

これが醒めたる所の信仰といふものである。斯う云ふ思想、信仰を人々に教へて廻つたならば、それがその人を幸福ならしめるのみならず社會をして圓滿なる發達を遂げしめ、國家をして理想的なる進歩に導くといふ力が、この信心感化の中から現はれて來るのであるから、そこで佛教の信仰を盛んならしむるのが、非常な立派な仕事であることが分かるのであります。この「醒めたる信仰」が佛教信仰の正統であり、この種の條件はこれより約十箇條擧げて見たのである。

### 就任の辭

#### 國友 日斌

「統一をして權威あらしめよ、」是れ天下を舉げて同志の熱烈なる聲にして、予が宿年の希望亦爾也。明治の大法戦四箇格言事件に際して觸起し、爾來歳度か道の爲に奮戦力闘の光榮ある歴史を有せる我統一、今の時日蓮主義の雜誌として本多大僧正を主幹とし、法華と日蓮に依りて現代を指導すべき責務を有せる我統一は、今の混亂紛糾せる思想界に何等の威力を發揮すべきか。

## 佛教聖典

### 佛徒唯一の誓願

#### 本多 日生

に不請の友となつて大悲もて安慰し、衆生を哀愍して世法の母とならん。

勝鬘佛に白さく、菩薩所有の恒河の諸願は一切皆一大願中に入らん、所謂攝受正法なり、攝受正法を眞に大願となす、佛勝鬘を誦めたまはく、善哉々々智慧方便甚深微妙なり、勝鬘佛に白さく、我れ當に佛の神通力を承けて、更に復攝受正法、廣大の義を演説すべし、佛はく、便ち説けと勝鬘佛に白さく、攝受正法の廣大の義とは則ち是れ無量なり、一切の佛法を得、八萬四千の法門を攝す、攝受正法は無量の福報、及び無量の善根の雨を雨らし、攝受正法は大乗の無量界蔵、一切菩薩の神通の力一切世間の安穩快樂、一切世間の如意自在を出生す。無間非法の衆生には人天の善根を以て之を成就し、聲聞を求むる者には聲聞乘を授け、緣覺を求むる者には緣覺乘を授け、大乘を求むる者には授くるに大乘を以てせん、是を攝受正法と名く、普く衆生の爲

この一章は諸種の誓願はこれを一大願中に統攝し得べきを説き、而してこれを攝受正法の一願に取り、更に進んでこの一願中に包籠せる意義を説明し、又各種の機根に對して適應せる教法を與へ、以て衆生の友となり、世法の母とならんと誓ひたまふたのである。この經意は、勝鬘夫人が佛に申上げるには、菩薩の多くの誓願は悉く一願の中に收まる、それは攝受正法即ち護法の一事である。斯う述べられた時に世尊は之を讚歎し給ひて、汝勝鬘が菩薩の誓願は護法の一に收まると言つたことは、是は實に善い事で、そこに眞實の智慧と方便の智慧との輝きが見えろと言はれた。その時に勝鬘夫人が更に申上げるには、私は佛のお力を承けて攝受正法の中に廣大なる意義が包まれて居る事を悉く申述べて見たいと

思ひます。更に佛のお許しに依つて夫人が言はれるには、大體一の護法と云ふ事の中には、一切の佛法、八萬四千の法門が包括されて居るので、その法を護つて行く事に於て一切が救はれるのである。恰度國家主義が國家を護り立てると云ふのは、唯だ國家のみの爲めでない、それは内には國民の安寧幸福を保全し、その國に現はれて居る過去の文明、將來に開拓する事業、外には廣く人類に對する活動一切が、國家と云ふ團結を完成することに於て行はれるので、其等の事と切離して内に國民の幸福を阻礙して國家を盛んにするとか、外には人類の幸福を忘れて國家を盛んにすると云ふのではない、國家を中心として其等の幾多の希望が満されるのである。護法もその通りで、佛の中に色々善い事が書いてあるけれども、先づ以て佛法を護持する事を根柢にして掛らなければいけない。故に攝受正法は無量の福報及び無量の善根の雨を降すのである。又大乗經の深い眞理も、菩薩の廣大なる力も、一切世間の安寧幸福も、一切世間の總ての要求も、悉くこの護法の中から生れ出る次第である。この護法と云ふ事は、唯だ法を護つて居るのみではなくして、宣傳するのであるから、會てこの正法を開きしことのなき者も、又觀る者も又普通の道德風能のやうな考へになつて居る者も、如何なる者も包容し、之を導き、次第に高遠なる佛教に來らしむるのである。聲聞の機根

の者には聲聞の教を興へ、緣覺の機根の者には緣覺の教を興へ、大乘菩薩の機根の者には又その教を興へる、それが佛敎である。佛敎は極く低級なるものと、高遠なる者とを包容して、一切衆生を普く濟度する所のものであるから、左様にして行くのが即ち護法であつて、その場合に自ら進んで法を求め、考の無い者にも此方から足を運んで彼を導くやうにする、彼より請

### 聖祖妙判

ぜずとも自ら之を善導し、大悲の心を以て慰め、大勢の人達を感んで死後に賽の河原で石を積むのを助けてやると云ふやうな迂遠な話でなく、現在人生に關する煩悶、懊惱、罪惡等一切の世間の事柄に就て、母の如き親切を以て之を濟ふて行かう、即ち現在生活の光となり、力とならうと云ふ事を誓はれたのであります。

## 日本國と法華經

本多 日生

日本國は一向に法華經の國なり、例せば合衛國の一向に大乘なりしが如し、又天竺には一向に小乘の國、一向に大乘の國、大乘の國なり、大乘の國にも法華經の國たるべし、(論議論聖公記聖德太子傳敎)是れ國を知らざる者なり。而るに當世の學者日本國の衆生等と成すは、譬へば寶器に鐵食を入れたるが如し等と云々(守護尊の譬傳敎大師)

(教機時國抄、遺四二八)  
大調和は宇宙の大法則にして人生文明の最高標的なり、故に國家と教法との冥合調和は中外に亘りて實現すべき大事なりとす、世には往々兩者の分離を高調するものもあるも、それは國家と宗教との形體に就て兩者混同の弊ありしより見たるものにして、理想の國家は教化の大本たるべき宗教を重んじ、理想の宗教は又人文を統率する國家の組織と職分とを重んじ、兩者各々その領域を護りて相侵さざると同時に、その内容の

## 教義

### 日蓮聖人教義綱要 (第廿八回)

井村 日威

### 第八章 修行

#### 第五節 宗教の五綱

本節已下は日蓮主義の信仰の用道の方面をお察する、吾人は本佛釋尊の大慈大悲に感孚し、妙法の本力に乘托して、安心立命を得、身心の安住處を得て、自己の所願已に満足して、大歡喜の境界に住することを得たのであるが、願つて他を見ると、生死の苦海に没在して出づる期を知らざるの輩は到る處に充滿して居る、各人は此状態を見つ、此を打捨て置くことは出来ない、一分の慈悲心の發現なくして可ならんやである、自慶慶他は佛道の通軌である、上求菩提下化衆生は菩薩の行願である、故に吾人の信仰は衆生救済の方面に其力用を顯現して行かねばならぬ、若も日蓮主義を信するものにして自己の満足に充足して、衆生救済の大事に進むことを得ざるあらば、未だ日蓮主義の要諦を會得して居らぬものである、大乘菩薩の行願を

體せざるものである、濟世利物を忘れたる信仰は、信仰其ものが成つて居らぬのである、故に吾人は法華經の廣宣流布に志すことが、直に吾人の信仰なりとお示に相成つた場合もある、他を救ふの考を起す以上は當然自己の信仰は得られて居るものであるが故に、化他即ち信仰なりとお示がある譯である、聖恩問答鈔に抑法華經を信する其行相如何、聖人示して云く、抑も佛法を弘通し群生を利益せんには、先づ教、機、時、國、教法流布の前後を辨ふべきものなり (編遺五七二)  
とお示に相成つたが、吾人が濟世利物の方面に其力用を使用するに當つては、宜しく周圍の事情を考察して、適當なる施設を要するのである但一面のみに没頭して他面を顧みなかつたならば、折角の努力も無効に終る様の場合が出来るに依つて、各方面より充分の觀察を遂げた上でなければならぬと御教訓に相成つたのである、其觀察の方面を教、機、時、國、序の五方面より觀察すべき様お示に成つて居る。

目的に於ては互に接近し、扶助し融合して、統一ある文明を實現すべきなり。日蓮大士は國家と教法との關係を認むるに於ても儘に一箇の模範を示せり、曰く「法は國を鑑みて弘むべし、彼の國によりかりし法なればとて此國にもよかるべし」と思ふべからず、法は體なり、國は影なり、體曲れば影斜なり」と、かくて國家は教法を尊重し、教法は國家を擁護すべきを示せり。今この教機時國抄の一節は我日本國は一向に法華經の大教義を尊重すべきを示す、彼の舍衛國に於て女稱王と勝鬘夫人とが共に力を合せて國內の人民男女七歳以上、悉く大乘に歸依せしめられしを引き、之を以て我國の模範となせり。會聖德太子鎮護國家の妙典を選ぶに當り法華經の三經を採りしは所以ある事にして、以後に傳敎の出で、法華經中心の佛敎を宣揚し、以て日本佛敎を統一したりしは之明に我國と法華經との不思議の因縁を事證するもの、日蓮大士法國冥合の趣旨も亦茲に存す故に今云ふ日本國は一向大乘の國なり、大乘の國にも法華經の國たるべしと。而してこの因縁關係を知らざるものは日本國を知らざる者なりと斷じ、且つ小權敎を我國民に興ふるは、恰も寶器に鐵食を盛が如しと云ふ、國民の自尊心は此の如き空々たる意義に於て發揚すべきなり、彼の漫に不能なる自我を推し立て、偉大なる教法を輕視し、而して自尊心を満足するが如きは、畢竟自己人格の低劣なるより來る、之誠に恥べきの事たり。

第一に教とは、徳敎の建設である、吾人類は教に依て智を研ぎ徳を樹つるの道を知ることを得るのである、若も人にして教が興へられなかつたならば、無智蒙昧なものでなければならぬ孟子は「人にして教無くんば禽獸に同じ」と云はれたのは實際の事柄である、教無き人類は生著人類の如きの状態にて生存するのである、吾人は教を離れては身心の修養も爲すことは出来ぬ、そこで其教と稱せらるるものは世の中に種々の種類がある、文字を學び、言語を習ふ、技術を研ぐ皆教であるが、其等の教の中で、一番大切な教がある、それは何であるかと云ふと吾人類の靈性を發揮して光明ある生活に進まむる處の教である、吾人は單に肉體上に充足なる生活を欲する許でなく、精神上にも満足なる生活を欲する、其精神上の欲求を充たすには、吾人の靈性(佛敎には佛性と云ひ、儒敎には仁と云ひ、基督敎には神性と云ひ、和魂には氣なり)の全部を發現し得ざれば完全なる精神的欲求は充たされぬ、其力ある教を建設せなければならぬ、其徳敎の建設に向つて努力するのが吾人の任務である、現在の吾國には一國教化の標準たるべき徳敎の建設があるかどうかと云ふことを考察する、此が第一の考察點である、觀普賢經の中に利居士懺悔の法としてお説になつたが、徳敎建設を以つて利居士懺悔の一方と定められた、文に「正法を以て國を治め人民を邪枉せず」(編法、五一五)

とある、此正法を以て國を治むる、正法とは吾人の靈性發現の大力用ある徳教を指したのである、一國教化の標準たるべき徳教の建設が無ければ、國民は思想上の歸着點を定むることが出来ぬ、國民は當然迷はざるを得ない譯である、我國には聖徳太子の時に十七憲法を發布して國民思想の統一調整を計られて、其趣く所を闡明せられ、桓武天皇の時傳教大師の主張を容れて思想の統一を計られたが、幾も無く紛亂を生じて、今日に至るまで徳教の建設は完成されて居ない、完成されない計りでなく、却つて誤れる教を以つて國民教化の標準と爲さんと爲しつゝあるものが出来た、此有様を慨嘆して日蓮聖人は大徳教の建設の一日も速かならんことを欲して法華經主義の宣傳に從はれたのである、立正安國論を時の政府北條氏に提出して正法治國の大建策をせられたのであるが、幕府は此建策を採用せざる計でなく迫害を加へて聖人の主張を挫こうとした、爾來六百餘年未だ一國教化の標準と爲るべき徳教の建設は完成されないのである、現代思想界の紛亂に留意するの士は第一に此點に就いて最大の考慮を要する、此が考慮を要する、此が考察の第一點である、

第二に機とは、文化の程度である、徳教の建設に就いては其國民の文化の程度を斟酌せねばならぬ、人類智識の發達には差別あるを以つて、其程度に應じて相當の教を要する、徒らに高遠に走せて其信解を得ざるが如きことあらば教化の目的は達せられない、又餘りに幼稚なる思想を以つて國民を愚にするが如きも亦國民教化の趣旨を失ふを以つて、高に走らず、低に失せず其智識に適當して此を善導啓發するの教化を垂らねばならぬ、此其文化の程度を考慮せねばならぬ要義である、

第四には國である、建國の理想を考察せねばならぬ、吾人人類社會には、各國を形造つて、政治經濟等の上に限界を立て、各國互に利益の保護に努めつゝあるのであるが、各國が各其國を形造るに就ては、各其建國の事情を異にし、國體政體の上に差別が存在して居るが故に思想問題信仰問題に就ても、其國家の事情を考察點に入れて置ねばならぬ、或學說の様に教育は國家的であり宗教は人類のものであるから國家杯を眼中に置くに及ばぬと云ふが如き者は大に誤まれるものと云はねばならぬ、現在の社會の事物は一として國家の背景を離れては存在し得ないと云ふことが事實である、宗教と雖も國家の背景なくしては一日も其効用を顯し得ない、現に露國正教の有様は如何である、露國の國家が勢力ありし際には相當有力のものであつたであらうが、露國解體の今日では同教の状態はお氣の毒の様である、日蓮聖人は立正安國論に、

國亡び人滅せば佛を誰か崇むべき、法を誰か信すべきや、先づ國家を祈りて須らく佛法を立つべし (續遺三八四)

に與へて行かねばならぬ、故に教其ものが此理想に反したものであり、國體を打壞るが如き教義を有するものであるならば、有害無益のものとして其宣傳を排除せねばならぬ、此場合に於て各國事情を異にするに依り甲國には支障あるも乙國には差支なき場合も生ずる、日蓮聖人は、

されば法は必ず國をかんがみて弘むべし、彼國によりし法なればとて必ず此國にもよかるべしと思ふべからず (續遺五七一)

は日蓮主義の完備せるものなるを語る一證左であると思ふ、

第五には教法流布の前後である、此は歴史の洗練である、萬物の發達には次第ありて存するは明かなるものであるが、吾人の思想界に於ても順序を経て發展すべきとは勿論である、永き時間の上に歴史の洗練を経て、其處に築き上げられたる文明、適者生存の原則に依りて淘汰せられたる文明は人類の欲求と適合して最も大なる幸福を吾人に與ふるものである、故に歴史上の發達を遂げたる文物を尊崇し擁護して行く事に注意して行かねばならぬ、新文明を建設せんと

か、今更悔いても及ばぬ次第であるが、我國現在の思想界の動搖其近因を世界思潮の影響に依るとするも、其遠因は明治維新の物質文明傾倒の思潮に基づくと言はねばならぬ、茲に第五點として歴史上の發展を考察の上に加へねばならぬ必要があるのである、

と抑せられぬ、必ず國情に適合する教法でなければならぬ、此點に就ては現代に於ては宗教に志す人々には充分の注意を要する、現今は一世の中西二にも西洋で、西洋心醉の人々の多き世の中であつて、相當知識のある人々の中に西洋崇拜のものが多きを覺ゆるの次第であるが、此等の人々が宗教信念に於て矢張り西洋の宗教を勝れたものとして信する人もある様である、此等の宗教が果して我國家に惡影響なきか國體の成立に妨なきか慎重の考慮を費されて居るかどうかと云ふことは大に疑はしき處である、彼等の宗教が西洋諸國の國體と抵觸せず國情に適當せりとすも、我日本國に於ては其國體の本義に於て建國の理想に於て相容れざるの點あるは明かなるに於ては相當の考慮を費したる上に於て信否を定むることが、有識階級にあるもの責任ではあるまいかと思ふ、日蓮聖人の教義が此點に就て特に考察すべきを教へられたる

然に、世運の進歩は何時までも夢の境に彷徨せられて其悲惨なる光景を呈して來たではない

以上五の方面より觀察を要する、最良最善の教化を施して行かねばならぬ、時代進運に伴ふて、其教化の方法を考察して、最も大なる効果を生ずる方法を以て衆生濟度の事に從はねばならぬ、要するに一人もより多く菩提の道に入らしむるに就いて、最有利の方法を考究案出して濟世利物の目的を達せねばならぬことをお示し下されたのが、此五綱と稱せらるるものである、此は用道の方面に五綱を以つて觀察する方を申上たのであるが、この五綱は又宗旨の信仰に就て體道を證議する場合にも、この五方面より觀察して、其何が教法として最勝のものなりや(教)衆生濟度の力ありや(機)時代に適當せりや否や(時)國體に妨なきや(國)思想發達の次第に於て接合せりや(序)と云ふことを審査した上で、決定せられたる信仰でなければならぬ、此場合に於ては五綱に依つて日蓮主義の宗旨たる三大秘法の一に超勝せざる所を以て明にするのである、五綱は超勝せざる三大秘法の宗旨を得て其邪正を糾明するの標準と爲すのである、三秘五綱相須て日蓮主義の教義の

基礎が確立せらるゝのである、これは體道の方面に五綱を用いたのである。

### 論叢

## 心性の開発

笹川 篁堂

經濟を生活の基本とすべきか道義を生活の基本とすべきかは人生生活に於ける問題として嘗て論争せられつゝあるが、餘りに淺薄なることであると吾人は一笑に附したい。人類理想の高下は文明の建設に至大の關係があるとなせば、國民思想の健全は國家の興廢の分岐點と謂はねばなるまい。崇高なる人格は完全なる教法に依りて生まるるものなれば、現代の様に肉欲に憧憬して何等の靈智の光を認め得ないのは、畢竟、完全なる教法の妙味を體得せない精神の貧困より生ずる缺陷である。

直しの外來思想を尊重する必要はない、我が國民はその特有の道念を風發して世界を善導するてふ氣魄がなければ、國家の前途憂慮に堪へない事になると思ふ。日本文明は、外物も包容する長所もあるが、また一面には之に涵養するの弊もある、日本國は光明の國土であり日本國民は靈智に輝く公明の行爲をする人種であるとの自覺と信念がなければならぬ、矛盾は丈夫の恥る處、而して矛盾は現代の通弊でないか、政治家の言行に矛盾あり、學者また然り宗教家また然り、斯の如くにして何ぞ世利民の大事を遂げられ得べきか、矛盾は豈た現代の通弊のみならず古今を通じての弊害である。

## 基督教徒としての大矢氏に與ふ(承前)

金島 英夫

以上を以て十一月三日一日分の駁論は略盡したと思ふ。是れ以外の論はしばらく私は差し控へ、今この拙文を綴る間に私の頭に往來した感想を書き誌してキリスト教徒としての大矢氏に與へたい。

□キリスト教徒は稍もすれば吾人佛教徒を捉へて「悲觀厭世の教を奉ずるものだ」と云ふが、果して佛教が悲觀的であり、厭世的であるかどうか。

□勿論佛教中にも、吾人は罪の子だと云はぬ計りな論法を以て基督教に類する「無抵抗主義」の「女性的」なものも無いではない。

□現世は穢土で、未來の極樂こそ吾等の望む處だ。今は假の世だ、たゞ西方極樂の阿彌陀佛をたよれ、と云つた風の淨土宗、眞宗などの流派もある事はあるが、其れとて佛性を全然否定した基督教如きから見れば、雲泥の差がある。

□況んや大乘佛教の極説、法華經、特に壽量品に見ゆる「生の肯定」の如き基督教の夢想だもなし得ざる處である。

□佛教が悲觀どころか、大法悅、大歡喜に燃えてゐるのが法華經の主義である。だから現在吾人の生存せる此娑婆世界をして直ちに佛國土たらしめやうとせられたのが聖者日蓮ではないか。

□日蓮聖人の一代六十年間の奮闘努力、如何に目覚ましかつたかは其れで分る筈である。基督は十字架に上せられ、將に殺されんとした時何と云つた。日蓮聖人は龍の口で北條氏の爲に首切られんとした時何と云つた。

□基督教は理智を斥け、批判を避け、小兒の心を以てするに非ずば天國へ入ることを許さなかつた。日蓮聖人は徹頭徹尾理智を重んじた。正邪の見と終始せられた。基督は學者を邪魔者扱にしたに反し、日蓮聖人は「佛法とは道理也」と教へ給ふた。法華經は元々智慧の經であり、佛智といふことを大切にし序品に於ける六瑞中放光瑞を最も重んぜられたことも智の表徴であるからである。

□神は何ぞ我を捨てたる」といつた意味の悲痛を帯びた言葉が基督の口から出で、「これ程の喜びを笑へかし」と歡喜に充ちた言葉が舌端に上り、欣然として刑につかんとしたのが日蓮聖人である。常樂院日蓮上人は、身の疵つく時、「是れ我の喜なり」と叫び、其弟子日秀上人も刑場に至る車上「喜ばしからずや」と云つたではないか。日蓮上人の流を拘めるもの概ね斯の如しである。

□或は「智者に我が義破られずば用おじ」と高唱せられ「愚人にほめらるゝは第一の恥也」と云ふも皆理智の尊むべきの主張に外ならない。

□更に一步を進めて、教義の點に於て、クリスト教は、如何に修行するも神の僕婢たることを得るのみで神の者には成り得ない。

□佛教、特に日蓮主義では、各人各々尊い美しい佛性を備へてゐる。これを開發すれば、男と云はず女と云はず、悉く完全圓滿人格の境地に到達する事が能き。即ち佛となり得る。

□反つて基督の聲の内に哀音、亡國の音を聞き

□基督教徒としての大矢氏に與ふ

は二元であると論じ、佛教では人も佛も一元であるが、たゞ其の表現として様々に別るゝのみで人には佛陀となり得る可能性の存することを説く。

□學問上、哲學の發達史上から見ても、二元的基督教の教理は一元的の哲學程進歩してゐないことは學界の定説である。

□次に一步を譲つて、神が人間を作り、事物を作つたにしても、そこに明白な矛盾がある。如神は全智全能、眞善美の化身であるなら、如何にして惡を作り、醜を帯へ、偽を製出したか、元々惡とか偽とかの素質のない神から何故にそんなものが生れたか。無から有が如何にして生じたか。

□また、それ程全智全能のクリスト教の神は、此の世に惡や醜を必要とする理由がどこにある全智全能ならば、今迄クリスチャンが二千年近くも惡や偽のために苦しんでゐるのを何故救けて此世を天國にしないか。

□全智全能の神が若し有つたなら、なぜ此世に戰爭といふ悲惨なことを作り出したか。今度の世界大戰の如きものゝ起る様な不完全な人間をなぜ作つたか。

□又全智全能の神の目から見れば人も動物も共に神に愛せらるべきものではないか。そののに人々は、ことに肉食の西洋人は、神の作つた牛や豚を殺して、人間だけが自由勝手な事をして良い法が何處にある。動物虐待防止だなどとい

ふ本元では平氣で動物を殺してそれを常食としてゐるのは何と辨明せんとするか。單に動物ばかりでない野菜にしろ生長せんが爲、種子を實らせん目的で神が作つておき乍ら何故人間はこれを無愆にも發育の中途で切り去つて食はなければならぬ様な矛盾を神はなしたか。

□大矢氏は此問題に就ては、又そんなことは既に二千年の間、高遠なる思想家に依つて考へられた問題である、其神學博士は斯う云ふた、誰れは彼云つたと巧妙に逃げらるゝであらうが、如何なる博士、神學者が何と云つたつて、根本的に横はる哲學上の缺陷から來るべき當然の歸結たる此矛盾は、少なくとも現代の吾人には解くことは能きない問題である。

□神が作つた物を、同じく作られた人間が、云はゞ同士の討つて殺して食はなければならぬといふことは確かに矛盾である。若しこれが矛盾でなく初めから殺して食へて可いとしたならば、クリスト教の神は無慈悲極まる神だと云はなければならぬ。

□私はクリスト教者ではないが、常識を以てこの矛盾の解決法の斷案を下したい。それは多分、多くの現代の人々も賛成せらるゝであらう。斷案とは、「一切を神が作つた、即ち一切のものを離れた神の存在を否定すること」である。

□次に私はクリスト教の罪の觀念に就て考へて見たい。いきなり人を捉へて「お前は罪の子だ」といふのがクリスト教の僻であり、主義である。特長であると同時に甚だしい缺點である。勿論吾人は自己を顧みて不完全の自覚はある罪惡的意識の發生を以て出發してゐるのは宗教の通有性である。

□樂天的な日蓮主義者だとして朝夕「若し、懺悔せんと欲せば端座して實相を思へ、衆罪は草露の如し」といつた觀念を凝らしてゐる。併し乍ら、一にも罪、二にも罪といつて、人の尊い佛性、心性の發達を阻害するのを無關心でゐる法がどこに在る。

□荷子が「人之性惡、其善者偽也」と云ひ「今人の性、生れながらにして利を好むあり、疾惡あり、是に順ふ故に争鬪生じ、辭讓亡び、殘賊生じて忠信亡び、分を犯し、理を亂すに合し暴に歸す、此に用て之を觀れば人の性惡なること明なり矣」を重んずると云つた。

□此性惡説が一面の理ではあつても全部でない事が、識者の定説であると同じく、罪の思想も一面觀に過ぎぬ。此點に於て比較にならぬ程發達した思想は日蓮主義に於ける一念三千の法門である。天台大師によつて理の一念三千が出發し、日蓮聖人によつて事の一念三千に到達した大乘哲學は、クリスチャンの特に研究せられん事をすすめておく。

□日蓮聖人の最も重要な根本哲學が逆も一言にして盡くさる可き物ではないが、要を取つてば、ヤソ教などの夢にも見る事の能きない活動をしてゐる。

□ヤソ教と同じく、正面から愛を垂れて、母親が子供の頭を撫でる様なものを佛敎では攝受といふ即ち寛の徳である。

□攝受と同時に佛敎には折伏といふがあり、父親の嚴の徳で、子供の間、異つた行をした時に苛責する様なもので子供が憎くて打つのではない、可愛さ餘つて打つのである。擲つて慈悲を示すのである。涙を振つてなぐるのだ。

□何と云つても親の心で、血あり涙ある折檻なましめんとする親の心で、血あり涙ある折檻なのだ。其證據には最も恐ろしい苛責のシンボルとして鐵の棒を以て威してゐるが如く示されてゐる。閻魔王に就て考へて見たい。

□其の閻魔王とは、そも何處から來たかと本地を尋ねて見ると蟲をも殺さぬ菩薩である。愛に満ちた菩薩である。それが假に閻魔といふ恐ろしい姿を装つて居るので、即ち佛敎での折伏は「孔明涙を振つて馬鞭を切る」といふのと同じで單に叩き壓すのではない。

□更に之を教學的方面から見れば愛を二つに別ち得る、第一は煩惱愛即ち染汗愛である、凡夫愛であり、不善の愛とも不善法愛とも云つて、善くない愛である、これに愛支、愛念、愛著の三つを含み愛にして信に非すとせられてゐる。

□第二のものは菩提愛であり、不染汗愛とも、之を云はゞ罪の要素をも認むるが故に寸分の油斷をゆるさないが、主眼とするのは罪の自覺でなくつて、徳性の自覺であり、佛性の自覺であり、佛性の開顯である。

□次に愛の方面を一瞥して見たい。愛とし云へば、クリスト教の專賣特許でゐる様に、愛の安賣りをしてゐる。汝の敵を愛せよとか、汝の隣人を愛せよとか吾等の耳は今迄愛といふ言葉をあまりに多すぎる程聞かされた。

□然るに果して愛が行はれてゐるか。一分間に十二冊づゝとも愛の宣傳書を配り乍ら、その愛が行はれてゐないとは何といふ悲惨なる滑稽であらう。

□若し眞に敵を愛する國があつたら、若し歐米諸國がクリスト教の無抵抗主義を守る國々であつたならば、今度の様な大戦争は勃發しなかつた筈である。

□敵を愛せよ々々々と云ひ乍ら四十二冊の大砲は多くの人々を殺した。敵どころか、神の子、オ、天にまします神よ」と日曜毎に教會で祈る、その神の子を殺した。

□どこに愛があり、どこに人道があるか。どこに敵を愛し、何に隣人をいたはつた例があるか。「我觀日蓮主義」中에서도説いた如く、今度の講和條文は正義人道の影を求めやうとしてさへ失望するではないか。民族自決主義を唱へながら印度や、フィリピン其他米國の黒人等の獨立をなぜ許さないで、獨逸を弱らせるためにたゞ

菩薩愛とも善愛とも、善法愛ともいつて、是れは慈愛と信愛とを内容とする。これは愛として正しい愛であり、愛にして食に非すとせられてゐる。

□今是等のものを一々説明する時間を有たぬ私に研究せらるゝ人々の参考までに表を掲げるとある。

□既に哲學上からは其内容に於て佛敎と耶蘇教

- 愛
- (一) 愛支
  - (二) 愛念
  - (三) 愛著
  - (四) 非愛非信
  - (五) 菩提愛
  - (六) 信愛
- 煩悩愛 (一) 愛支 (二) 愛念 (三) 愛著 (四) 非愛非信 (五) 菩提愛 (六) 信愛
- 菩提愛 (一) 慈愛 (二) 愛而非信 (三) 信愛 (四) 愛而非信 (五) 菩提愛 (六) 信愛

更にまた、信愛を別つて四となし、信愛の四句とは

信愛四句

(一) 信而非愛 (二) 愛而非信 (三) 亦信亦愛 (四) 非信非愛

【註】(一) 愛支は十二因縁の第八で男女間の愛の如き、(二) 愛念は煩惱の一、狹義にして憎惡に對す。(三) 愛著は意思感情に屬する凡夫の煩惱の全體、廣義にして思惑、集、(四) 慈愛は眞理の證悟又は眞理の信仰より來る平等慈悲の心、即ち正法の信愛で衆生に對して起り、(五) 信愛は正師を敬愛し正法を信愛するもの。

とは比較にならぬ程の差がある上、事實に於ては...

叫び、風俗上に於ても聖書は淫事を懲罰す...

義と基督教なるものの眞面目が躍動してゐるか...

旭の森 深澤孝

(一)この世の人の、光もがたと、もどめてやまず、廿歳を、はげみしほどに、その甲斐ありて、...

記事

自慶會支部設立經過概況

自慶會は總會の決議に基づき、名古屋京都大阪神戸の四大都市に支部を創立する...

勸誘の協議を爲し府職員には充分努力せしむべきを約せり、此に於て午後大阪に向ふ...

すを可とする事情あり、故に大阪の運動は他日譲り午後神戸に向ふ、篤志家草鹿甲子太郎寺...

日朝濱岡馬淵西村諸氏と擴張に關し協議し正午名古屋に向ひ、直に銀行集會所に於ける創立會に出席す、佐藤市長淺山助役森中將丹羽少將江口理三郎其他合して二十三名來會す、豫期以上の盛なる創立會なり、小幡内務部長宮尾知事も出席の筈なりしが、臨時議事の終りの日に當り議事決了せず、爲に出席せざりしも、熱心なる創立者なり、細則を議し、理事長には森中將を推爲し、事務所は森中將丹羽少將の兩氏に決定方を一任したり、同夜馬場喜右衛門氏創立費として金壹百圓を寄附せらる、同夜晚餐會迄の一切の經費約貳百五十圓は本多日生に於て寄附支辨し、馬場氏の寄附金は今後の事務費に當つる事とし、森理事長に渡せり、同夜新榮町常徳寺に宿す、翌廿日午前中は森中將大久津清水諸氏と共に創立上の事務打合せを了し、國友日斌は同地に留まり本多日生は午後四時四十分の特急列車にて歸東せり。(本田日生手記)

### 巡回教化

(うごくてら)

社會破壊の大原因として憂慮すべきは、住宅を失ひたる浮浪者の激増と、及び細民間に宗教心の絶滅するとの二つなるが、住宅の問題は爲政治家によりて考慮せらるべき性質に屬するに非ざり、吾人は此所に國家の爲に細民の巷に入りて彼等に清新なる宗教信念を注入すべく發願し、

其方法として撰ばれしは即ち「うごくてら」なり巡回教化(うごくてら)と大書せられたる天幕の内には正面に大本尊を安置し、諸の色香味を供へ、表には旌旗、繻子、照燈、燭、莊嚴なる法要は統一團所屬の僧侶によりて嚴修せられて細民の祖先の冥福と、細民の安全息災延命當病平癒を祈る、大本尊の御前に供へられし供物は、やがて參會せし細民の爲に絶好の家土産となつて、老ひたる父と病める子とを慰さめん日目の生活に道はれて營々努力せる細民の内にも尙亡びざる宗教の信念は残り、されど彼等は生活の問題に逐はれ荒び行く心は宗教に來るべき餘裕を有せず、吾人はこの憐むべき佛子の爲に其巷に入りて菩薩の事を行ざんとす、斯くて形式より進んでやがて其所に佛陀惠光の花開きなん。一面簡派されたる熱誠なる僧侶は常に細民の巷を巡つて、人事の顧問となり、憂苦の友となり、以て彼等を誘導慰安すべく、一面同志の信徒は吾人の舉に賛同して外護の任を盡すべく、細民の爲に適當なる職業を斡旋し、以て彼等の生活の狀態を改善せんとす、斯くて巡回僧侶と、外護の信徒とを、丁寧なる宣傳者として細民に紹介さるべき我が「うごくてら」は喜悅に充ちて來集せし細民の爲に、法要と、簡易なる講話と、及び餘興を試みて、意義深き一夕は社會より落伍せる彼等の爲に當處佛國を現出すべきか。この巡回教化は本月下旬より統一

### 統一團國禱新年宴會

大正九年一月五日午後二時より統一團正境寶前に於て統一團總裁本多日生現下を大導師として紫紅の御僧二十餘名、清淨の檀徒二百餘名を圍みて法座をなし佛天の諸尊、國祖の神靈を勸請し奉りて法鼓梵鐘いと嚴かに讀經唱題し正法の興隆皇國の隆盛を熱望し、了つて會堂に移り屠蘇を吸んで新春の法悦を分つ、されど此は唯一片年賀の清歡にあらず正に是れ日蓮主義者が來るべき法戰に殉ぜんとする首途の盃とも見るべく、法樂の裡自ら沈重の調なかるべからず、又勃々たるの意氣なかるべからず、げに日蓮が弟子檀那は臆病にては叶ふべからずと、

逐次熱辯を振つて熱誠抑へ難き所感を述べ軍氣益々旺盛はざるに早くも敵艦を屠れるの觀あり、寶前の柱香薫じ法燈輝きて聖祖高き善哉と讚歎し給ふが如く懺悔自強すべしと慈戒し給ふが如く一同起立して萬歳を三唱して會を閉づ、開を出づれば月天心にかゝつて雲霧なし、立ち渡る身の浮雲を晴れぬべし妙のみ法の鷲の山風と口吟み行く足なみいと目出度し。(妹尾義郎)

- 新年會志納芳名
- 金貳圓也 齋藤良太郎殿 金壹圓也 須藤寅吉殿
- 金五圓也 宮原六郎殿
- ◎山田日廣師の遷化 湘南小田原町妙經寺主山田日廣師は温厚の君子人なりしが、老體の事とて昨年已來兎角病床に親しみ勝にて、遂に舊臘廿五日いと平和の臨終を遂げられたり。翌廿六日親戚故舊檀徒百數十名相會し、山根日東師を大導師に、石川顯隆武田顯龍の兩師を副導師として、嚴肅なる法要を執行せられたり

### 天晴會拾貳周年記念講演會

法軍の總裁日生現下は先づ起つて拍手に迎へられ徐ろに現下の混亂濁惡なる時代の思潮を概説せられ、日蓮主義ならんば是が救済の不可能なるを論じ轉じて當年進軍の陣容を明されて當開日講演の督勵、雜誌統一の刷新、自慶會の擴張、支部の設立、天晴會の革新公開講演、日蓮主義宣傳學生聯合會の指導、細民部落の巡回教化等、異體同心以て國家の安危千載一遇の時運に日蓮主義の面目を光揚せんと獅子吼して祝盃を上げられ次いで小原少將、岩野造、船大、矢野茂閣下、宮原六郎、大原亮三、君妹尾義郎、君

日蓮聖人の人格及び主義を賛仰して各自の修養を積み進んで國民の間に眞摯剛健なる思想信仰を鼓吹し一國の風教をも改善せんととの趣旨にて

團社會部の事業にして、東京及神戸に開始さるべく、主任として高木本願師等、外護の信徒として玉川野島兩氏等を得て大活躍を試んとするなり。記者客觀總裁親下に従つて京阪神に旅行す、大阪に於て痛快なる筈を開けり一次の騒擾には寺院を焼拂ふべし、今の社會問題は物價と住宅との二なり、衣食は質銀の増加に依つて稍改善されしも、住宅は依然として拂底にして四層半に五人七人住居せる状態なるに、寺院は百層五拾層の廣き面積を占有して、而も其處に起臥せる僧侶は何等社會の爲に活動せず、故に我等は來るべき騒擾の機會に寺院を焼いて眠れぬ佛教徒に大警告を加へん」と、是れ大阪市民の熱烈なる叫びなり、爲政治家も、實業家も、新聞記者も、僧侶其物も一致して絶叫せる聲なり實際に佛教徒の現状は大覺醒を必要とす、彼等今にして覺醒するに非れば、或は大坂市民の聲は事實と成つて現はれん。吾人は彼等の態度に係はらず、起て國家の爲に一切の必要なる問題に向つて、佛祖の聖訓を奉じ、到所に奮闘せんとす、各地の寺院が燒き拂はれてあはてた僧侶がうろたへ騒がんとす、我が「うごくてら」のみは益々其能力を發揮して、即其道場の天幕内には、佛陀の聖訓の説かれ、宗祖の教訓の紹介されて、無量の蒼生を濟度し國家社會の爲に一大功勳を樹立すべし、請ふ同志諸氏、我が「うごくてら」の前途に期待せよ。

學生軍人實業家等熱誠求道の志士相集りて天晴會を創立したのは明治四十二年一月であつた、爾來春花秋月十有二年、今や振古未有の大戦も終息し平和克復と共に改造の聲頻りに喧しく正安國現安後善を標榜せる日蓮主義者には感慨特に深き大正第九の新年、春猶若き一月十七日天晴會十二年記念會は統一團に開かれた午後四時といふに開の樓上には續々と會員が詰め掛けて居る、やがて幹事關田日城起て開會を宣し「天晴會創立以來正に十二年、日蓮主義の普及と共に思想界に多大の貢獻を爲し特に我國宗教界の會合團體が起滅常ならざる中に獨り本會が長き生命を持続し將來倍々隆盛を極むるは法國の爲め慶賀すべし」と述べ是より同幹事の司會にて協議會に入り(一)十二年周年記念として各處に講演會を開設す(二)毎月の例會講演は爾後公開し一般の聽講を許す(三)本會々員は各自一人以上の會員を勧誘加入せしむ可し(四)會費は本年度より二倍とす(五)本年は龍口法難六百五十年に相當するに由り講演其他の事業を以て之を記念する等の諸項を決議し猶岩野造船少將は本年より大に幹事として盡さんことを決諸し、より食堂を開きて祝宴を張り會員五、五、五に草をみ、此處一團の悦樂悠々たる寂光淨土を實現し、中山阪本各海軍少將、小原野澤の各陸軍少將や幹事關田日廣中將など快論縱橫大に日蓮主義の氣分を漂はすれば本多會長や望月野口等の僧正連、山川博士、牛井桃水君など大分メイト

本會の前夜、六十餘名の會員快談、歡呼の裡に互に... (text continues)

世界列強は是迄は獨逸の軍國主義を憎みたる... (text continues)

上に述べた、開口一番日蓮聖人の社會改造に對す... (text continues)

き、現今改造論者の缺點を指摘し、國家主義の... (text continues)

脚本河邊の吹雪

野村香明子

第一場 京都六條河原の夕

平舞臺、下手より正面中程へかけて橋。夫に續いて上... (text continues)

妙滿寺貫主常樂院日經、三輪志摩の守長好、紅(くれない)板倉伊賀の守、... (text continues)

連主義を益々旺盛ならしむるに在る、... (text continues)

下僕 忠七、警護の士、信者、行人、... (text continues)

酒三、よまひ言吐す賣僧奴のために、日脚の傾ひ... (text continues)

酒

かね草木はないと云ふ御威勢ふり、夫とは... (text continues)

酒

これや眞實であらうかな、... (text continues)

酒

沙汰ではないか、... (text continues)

酒

刑とはなるのか、ちと聞えぬなされ方と... (text continues)

三

無人の出家のこと、後の祟りを恐れて扱て... (text continues)

志

彼方に見ゆるが今宵の刑場が、正法弘通の... (text continues)

忠

私に涙を拭ふ、舞臺少しく暗くなる... (text continues)

紅

志摩には心付かねぬにて、... (text continues)

忠

じう引廻はされておいでのことだらう、... (text continues)

紅

お辛いこと御座りませう、... (text continues)

志

お師匠様のことを思へば影のやうに、... (text continues)

忠

思ひ懸けない、これはまあ旦那様で、... (text continues)



忠 致し居るが、めつたに心を許してはならぬぞ、

紅 左様に御座りました、年甲斐もなく此の爺が口をすべらして御座ります、どれ、誰が参らうも知れませぬ、爺は邊りを見て参りませう、

志 父子の物語りを避ける體にて舞臺の上を下をよき程に見廻りて上手へ来る、

紅 父上！日秀様の無事な顔も、はや今宵限りで御座ります、鼻を削がれ、耳をお切られ遊ばすと聞ては、又新らしい嘆きの種で、御落髮あそばした時にも増す、つれない悲しさが染々胸に迫つてなりませぬ、

志 そなたの心根は不堅ながら、これが浮世のつねであらう、關東方ゆへに、已に一命危ふかりし秀治君を、豊太への報恩の爲とあつて、加賀の城下へお連れありしは身共の主君前田利家公、世を憐りて人知れずお世話ある内に、主君は敢なく御他界遊ばされ關東方の思惑もあらうかと、此方がお勤め申しての御出家、昔を思ふよすがもと、その名も日秀とお改めありし時には、其方が嘆く夫よりも、一しは辛い想ひを致したぞ、

紅 それはよう／＼存じて居ります、私とても想ひ思はれた身の果報を捨て、御身の爲と、出家得道お喜び申ましたなれど、世折御出家遊ばした甲斐もなう、未練な愚

志 ト 伸び上つて上手を指す、

志 オ、物々しいあの警護の武士はどうちや、面縛のまゝ瘦せ馬にお乗りなされて、何と云ふお痛ましいことだ、

忠 然し且那樣、あのお氣高い御様子をこらんじませ、日蓮様の再来と、諸人のお慕ひ申すも無理ならぬこと、ヤ、馬をあれてお降り遊ばしました、

志 父上！實て他所ながらお二人様へ、久振りのお目もじ揃へさせて下さりませ、

紅 當座の御挨拶も致させてやりたいは山々なれど、何を云ふにも人目を憚る女子のごことは非ないこと、暫し彼方へ参つてゐるがよいであらう、

警 上手を指す、紅、忠七と首肯合ひ、

信 勿々上手へ這入る、志摩衣紋を結び日經を待つ體、日經、日秀、板倉伊賀の守、警護の士に固められて登壇、舞臺一段と暗くなり松明のみ照り渡る、

警 一同の後より信者、行人、等従ひ来る、

信 エ、まうならぬと申すにまだ執拗にあと從けて参るか、

同 お上人様が御身の一大事、教化に預る私共にお處刑の済むまでお題目をお許しなされて下さりませ、

同 明日からは洛外へ御追放と聞けば、今宵が暫しのお別れで御座ります、

志 痴を覺えまする、どうぞお察しなされて下さりませう、

紅 左様に申すは女の淺慮、秀治君が幾多、數ある宗門の中より、ことに目出度い法華宗を御撰びなされて、高德並びなき日經上人を、師の坊と致されたにも、ゆめおろそかに聴くまじい由緒があるのぢや、

志 そりや又どんな次第で御座ります、

紅 其方も曾ては秀治君と、二世を誓ひし果報者、今宵に迫る御法難を、仇し心で見参らせてはなるまいぞ、關東方は人も知る念佛申す邪道の輩、増上寺廓山和尚らが候辯にたぶらかされて、一佛乘の妙理を知らぬ、此の世ながらの因果者、一度發心佛弟子となるからは、正法に歸依すること本懐と、妙法の弘通を思ひ立たれ、師の坊共

志 に苦行をなさる、其の御心の裡には、佛なく失せられし一門縁者追福のため阿鼻大城へ落ちんと致し居る念佛者に、法華經の切力を俟つて成佛の因縁を結ばせよう御所存と、畏れながらお察し申して居る、

紅 追は難家にお生れ遊ばした秀治君、御武運拙く在しませうとも、有難い法華經をお保ちなされて、地獄とやらへ墮べき關東方一味の者を、妙法に歸依致すやう折伏遊ばすと、まことに良い所へお氣附かれたこと、得道御決心の理由、今初めて合點致します、

志 下下さりませ、

同 お健やかなるお顔を見るもあと幾時やらと殊の外嘆かはしうてなりませぬ、

伊 如何に申ても早や、是より先への隨行ならぬ江戸表より吳々お連しのあつた重罪人、此の上強てと申さば用捨致さぬぞ、

伊 ト 嚴かに一喝する、

信 では御座りませうが……

同 たゞ偏へにお情のほどを……

伊 折入つてお願ひ申す、

信 い、や聴き届ける事は相ならぬ、それ皆の者を追ひ返せ、

日 云はれて警士、信者等を追はんとす、行人等私語けるが逸早く駆け去る、信者等の去らじと争ふを見て日經靜に進み出て、

警 暫く、暫く待たれよ、

同 警士を止め、思入よろしく信者方に向ひ、何と各々方、日經が信門徒と名乗らせらるゝからは、物の道理よく聞き分けられよ、身不肖なれども法華經を受持して開祖大士の本懐を續ぎ、日本國一切衆生の開照す妙法の五字七字を弘通せんと、日夜折伏教化を致せど、況字色勝とやら鬼角末法の世は正法弘通も至難にて、是非なく今宵處刑に遇ふも、悪人留難をなさずば菩薩の行なり難きものと覺し、さのみ嘆かざるには及ばぬ、常日頃法重くして身は輕しと

志 然しながら正法弘通は至難の儀、遠く日蓮大士御在世の御にも、大難四度の迫害あり鬼角當時の執權に、禁めらるゝは心外千萬さう承れば唱題の御修行思ひやられまするに、萬に一つも……

紅 ト 邊りをいたく懸念して聲を低め

志 もしや若君のお生れ立ちが、關東方へ洩れるやうな、恐ろしい事に成りはしませぬか如何様その懼れがないでもない、常樂院師が四箇格言の擁護に餘念なく御苦勞なさるさえ、關東方は重き罪科に問はんと致し居る、然るにその法弟の日秀様を、はや家

紅 の若君と推測致せし様子にて、とかく夫が、懸念とみえ、此上は法門に事寄せて師弟共に慘刑に處し、後の祟を除かうものと今宵の大難出来いたしたかと、おそましながら推測致さずにはわられぬぢや、

志 すれば今宵のお處刑で、見る影もなうお變りなされた此の上に、明日からは又どうしてお暮し遊ばすことで御座りませう、

紅 定めし水に浮ぶ根なし草のやうに、風のまに／＼漂浪の、はかない旅をなさる事だらう、

ト 語る裡に感激して涙に咽ぶ、

忠 舞臺は更に暗くなつてゐる、

志 燈が見えて御座ります、賑々しい人々の聲が聞えて参りました。

秀 申すも、常樂院が此の肉を傷付けて只管いみじき、法華經を保つ、此の期の心狀をこそ會得いたされよ、さらば早やこれ迄でござる、

伊 師の坊が仰せの通り、我々師弟六人今宵こゝに刑を享け、剩へ洛外逐放の難に遇ふも、偏へに大法擁護に努むればこそ、法華行者に刀杖瓦石の諸難ありと勸持品に記されたるを思召さば、只今に迫る法難こそ眞實に無上の悦びなれと、共々祝願いたされて然るべきでは御座りませぬか、

信 其の事譯は辨へますれど、日頃よりのお慕はしさに堪えませぬ故、破格のおとりなしを以つて、盡きぬお名残りを惜しませて下さりませ、

伊 只管、お願ひ申上まする、

志 ならぬ／＼、いつ迄あるも名残りは盡きまじ、いざ疾く歸れ、

伊 ト 又も一喝する此の時志摩靜に進み出て先づ、待たれ……

志 ト 邊りを見廻して制す、日秀志摩を見て意外の思入にて、

伊 珍らしや三輪殿では御座りませぬか、フ、又ぞ常樂院が有縁の者か、天下の科人を預り申す、某こそ板倉伊賀の守、役目大儀で御座るに由ない物語り致されては徒らに時移りて迷惑至極、疾く此所を罷り出よ、

志

ヤイ、身共は禁裡の聖旨を畏みてこれへ推  
參致した、三輪志摩、名は長好と申す者、  
なれど幕府の憚り多ければ、供の者一人召  
しつれず參つてござる、先づ夫へ控へられ  
よ、  
ト 厳しく一脱したる後容儀を正して如何  
に常樂院、其方が一志教化に他意なき至誠  
天聴に達し、畏れ多くも今宵こゝに由々し  
き御沙汰を下されたいで、謹んでお受けを  
致すがよからう、  
ト 云ふを聞いて日秀初め信者等思はず感  
激のまゝ唱題題目する、日經進み出て  
ト 恭しく拜受したる後、  
愚僧が身に餘る敬慮の恭けなき、只今權大  
僧正の榮譽を拜受して、目出度法華經に光  
輝を添ふるは、偏へに諸佛の加護と覺え、  
こよなう勿體なく存じます、  
ト 感激の餘り暗涙に咽び唱題する、  
日蓮が所立の四箇格言は、佛勅を奉じたる  
深甚の宣言、その宗義を受持するからは、  
よく祖訓を守護して見事大願の成就を期せ  
られよ、  
若年より不惜身命の行者となりて、祖士の  
遺訓を繼ぐも、たゞ是れ煩悩の無明を拂ひ  
て、世の人の爲にも成す所あらんと思ふ常  
樂院が微衷、くる織の射ん強者にも劣ら  
ぬ心のほどは、總て法華經の功力に依つて  
日本一州を風靡致すでござりませう、何と

志

お上へ、然るべく御禮のほど御披露を仰ぎ  
ます、  
ト 改めて信者等の方へ向ひ  
其所等佛縁につながらせ給ふ殿原達の見ら  
るゝ如く日經は今や、遇ひ難き天恩に浴し  
て隨喜の涙に咽び申した、是れ一人常樂院  
が身の悦びにあらで、各々方の爲にも悦ば  
しき一大事、何とこの悦びを家土産に、い  
ざ疾く家路に急がれよ、  
ト はや立て……  
ト 再び信者等を追はんとす、各自残り惜  
しげに立ち上り  
さらばで御座ります、  
ト お健全に在らせられますやう……  
御赦免の日を只管祈念致します、  
誓へあじきなく別れやうとも、怠らず信心  
な致されよ、  
ト 縁あらば又再會の日も參るで御座りませう  
ト 云へば信者後見返り勝ちに漸く去る、  
お互の間に題目の聲暫し續く、  
ト 早や、某使命のほどは了へ申した、  
ト 上手の方を見て皇居を思ふ思入よろし  
く禮拜す、  
ト 因縁浅からぬ三輪殿を介して、今宵の御沙  
汰に遇ふとは日經存じ寄りも無いこととて  
殊の外祝致します、  
ト 志摩に云ひかければ、三輪日經の前に  
跪きて恭々しく

日

ト 云ふを聞いて日秀初め信者等思はず感  
激のまゝ唱題題目する、日經進み出て  
ト 恭しく拜受したる後、  
愚僧が身に餘る敬慮の恭けなき、只今權大  
僧正の榮譽を拜受して、目出度法華經に光  
輝を添ふるは、偏へに諸佛の加護と覺え、  
こよなう勿體なく存じます、  
ト 感激の餘り暗涙に咽び唱題する、  
日蓮が所立の四箇格言は、佛勅を奉じたる  
深甚の宣言、その宗義を受持するからは、  
よく祖訓を守護して見事大願の成就を期せ  
られよ、  
若年より不惜身命の行者となりて、祖士の  
遺訓を繼ぐも、たゞ是れ煩悩の無明を拂ひ  
て、世の人の爲にも成す所あらんと思ふ常  
樂院が微衷、くる織の射ん強者にも劣ら  
ぬ心のほどは、總て法華經の功力に依つて  
日本一州を風靡致すでござりませう、何と

日

ト 其の時紅忍びやかに下手より現る、  
ト 然らば是が當座のお別れ、今は如何なる津  
々浦々の漣にも、三ツ葉の紋所を見受けま  
すれば、何處に御身を安らはせらるる事や  
らと、私かに心痛申上げます、  
ト 本門妙法の法雨も、遍く大地をうるほさで  
は置かね、ゆめ御願念なされまい、  
ト 強き意志の閃めきを見せて云ふ此の時  
上手より月光を浴びて紅おそるゝ

志

ト 云ふを聞いて日秀初め信者等思はず感  
激のまゝ唱題題目する、日經進み出て  
ト 恭しく拜受したる後、  
愚僧が身に餘る敬慮の恭けなき、只今權大  
僧正の榮譽を拜受して、目出度法華經に光  
輝を添ふるは、偏へに諸佛の加護と覺え、  
こよなう勿體なく存じます、  
ト 感激の餘り暗涙に咽び唱題する、  
日蓮が所立の四箇格言は、佛勅を奉じたる  
深甚の宣言、その宗義を受持するからは、  
よく祖訓を守護して見事大願の成就を期せ  
られよ、  
若年より不惜身命の行者となりて、祖士の  
遺訓を繼ぐも、たゞ是れ煩悩の無明を拂ひ  
て、世の人の爲にも成す所あらんと思ふ常  
樂院が微衷、くる織の射ん強者にも劣ら  
ぬ心のほどは、總て法華經の功力に依つて  
日本一州を風靡致すでござりませう、何と

志

ト 其の時紅忍びやかに下手より現る、  
ト 然らば是が當座のお別れ、今は如何なる津  
々浦々の漣にも、三ツ葉の紋所を見受けま  
すれば、何處に御身を安らはせらるる事や  
らと、私かに心痛申上げます、  
ト 本門妙法の法雨も、遍く大地をうるほさで  
は置かね、ゆめ御願念なされまい、  
ト 強き意志の閃めきを見せて云ふ此の時  
上手より月光を浴びて紅おそるゝ

同

ト 云ふを聞いて日秀初め信者等思はず感  
激のまゝ唱題題目する、日經進み出て  
ト 恭しく拜受したる後、  
愚僧が身に餘る敬慮の恭けなき、只今權大  
僧正の榮譽を拜受して、目出度法華經に光  
輝を添ふるは、偏へに諸佛の加護と覺え、  
こよなう勿體なく存じます、  
ト 感激の餘り暗涙に咽び唱題する、  
日蓮が所立の四箇格言は、佛勅を奉じたる  
深甚の宣言、その宗義を受持するからは、  
よく祖訓を守護して見事大願の成就を期せ  
られよ、  
若年より不惜身命の行者となりて、祖士の  
遺訓を繼ぐも、たゞ是れ煩悩の無明を拂ひ  
て、世の人の爲にも成す所あらんと思ふ常  
樂院が微衷、くる織の射ん強者にも劣ら  
ぬ心のほどは、總て法華經の功力に依つて  
日本一州を風靡致すでござりませう、何と

同

ト 其の時紅忍びやかに下手より現る、  
ト 然らば是が當座のお別れ、今は如何なる津  
々浦々の漣にも、三ツ葉の紋所を見受けま  
すれば、何處に御身を安らはせらるる事や  
らと、私かに心痛申上げます、  
ト 本門妙法の法雨も、遍く大地をうるほさで  
は置かね、ゆめ御願念なされまい、  
ト 強き意志の閃めきを見せて云ふ此の時  
上手より月光を浴びて紅おそるゝ

伊

ト 云ふを聞いて日秀初め信者等思はず感  
激のまゝ唱題題目する、日經進み出て  
ト 恭しく拜受したる後、  
愚僧が身に餘る敬慮の恭けなき、只今權大  
僧正の榮譽を拜受して、目出度法華經に光  
輝を添ふるは、偏へに諸佛の加護と覺え、  
こよなう勿體なく存じます、  
ト 感激の餘り暗涙に咽び唱題する、  
日蓮が所立の四箇格言は、佛勅を奉じたる  
深甚の宣言、その宗義を受持するからは、  
よく祖訓を守護して見事大願の成就を期せ  
られよ、  
若年より不惜身命の行者となりて、祖士の  
遺訓を繼ぐも、たゞ是れ煩悩の無明を拂ひ  
て、世の人の爲にも成す所あらんと思ふ常  
樂院が微衷、くる織の射ん強者にも劣ら  
ぬ心のほどは、總て法華經の功力に依つて  
日本一州を風靡致すでござりませう、何と

伊

ト 云ふを聞いて日秀初め信者等思はず感  
激のまゝ唱題題目する、日經進み出て  
ト 恭しく拜受したる後、  
愚僧が身に餘る敬慮の恭けなき、只今權大  
僧正の榮譽を拜受して、目出度法華經に光  
輝を添ふるは、偏へに諸佛の加護と覺え、  
こよなう勿體なく存じます、  
ト 感激の餘り暗涙に咽び唱題する、  
日蓮が所立の四箇格言は、佛勅を奉じたる  
深甚の宣言、その宗義を受持するからは、  
よく祖訓を守護して見事大願の成就を期せ  
られよ、  
若年より不惜身命の行者となりて、祖士の  
遺訓を繼ぐも、たゞ是れ煩悩の無明を拂ひ  
て、世の人の爲にも成す所あらんと思ふ常  
樂院が微衷、くる織の射ん強者にも劣ら  
ぬ心のほどは、總て法華經の功力に依つて  
日本一州を風靡致すでござりませう、何と

統一閣 月報

定期日曜講演會

十二月七日、鎌倉時代の佛教 長谷川義一、日經上  
人 野口日主 願佛未來記 本多日生、十四日 報恩  
道徳の本體と其影響 高木本順、本門の戒壇 關田  
日城、佛教信仰の正統 本多日生、二十一日 佛教  
倫理觀 妹尾義郎 聖祖いまさば 秋山乾英、教法  
と人格 笹川日堂。  
一月十一日 新年の辭 妹尾義郎、法華眼に映じた  
る先代善本紀 松尾義城、吹風不鳴枝 石塚日朝  
佛教信仰の正統 本多日生、  
▲統一閣附屬講演會  
毎日午前子供會 夜青年會法華經講義、  
十三日夜本願正道會 妹尾義郎 關田日城、十五日  
夜日本橋久保田氏宅 妹尾義郎 木村日保  
▲子供會 志納芳名  
金五拾錢、塚本マツ殿 金五拾錢 増田清子殿

新春の感

妹尾 義郎

春の始めの御祝ひは、月のみつるが如く、潮のさ  
すが如く、草のかこむが如く、雨のふるが如くと  
思ふすべし。日蓮聖人初春御書  
門松を冥途の旅の一里塚と辭した一休和尚もあるが  
それは現世に執着して常見と醉した一休和尚もあるが  
無常なる死出の旅なるを看みさせる意味に取ればよい  
もの、新春を迎へた世の悦びを歌ふべき、人の清く芽  
出度い心を表現すべき者ではない、矢張り日蓮聖人が  
祝ひ遣された御心が有難い。行手に浮雲は深ふも、夜  
毎に月の満ちゆくが如く、寄せては返し寄せては返し  
て希望の海の洋々とみつるが如く、冬枯、野山に若草  
の新々として生ひ育つが如く、慈悲の雨の降りそいで  
一切がうるほすが如く、年の始めの心地はあつて  
欲しい。  
五十年の人生、五尺の小軀とのみ見るならば、それ  
はいかに位が高くても、家に百萬の富あるも、不出世  
の才能があつても、理想が輝いても一度死靈の手に握  
へられれば、あはれ一堆の白骨、其時倉の財が何だ、  
藝術の才能が何だ、爵位が何の力となる、消えゆく刹  
那の感概果して如何ぞ、一休の所謂目出度くもなしと  
いふべき乎。  
信仰の春は明けた、そこには永遠に亡びぬ世界があ  
る、「我が此土は安穩にして天人常に充滿せり」と御經  
にある。不滅の光明が輝く、悦びがある、樂みがある。  
望みがある、力がある、恵みの雨は日夜に降つて、感  
謝の木の芽は毎日育つ。轉び落ちた谷底にも月影を  
宿した希望の泉が滾々と湧き出てくる。耳をすませ  
ば、み佛の御聲が聞える、絶望すな再び起て!! あゝ  
月のみつるが如く、雨のふるが如く、み佛の大慈悲  
は信者の身に浴びせられる。題目の聲は緑の松風に  
送られる。南無妙法蓮華經 南無妙法蓮華經。  
初春の悦びは層層とない、厭の財でもない、明け行  
く空に仰がるるみ佛の恵みであり度い、年々に磨か  
れる尊い佛性の輝きであり度い、満ち来る信仰の悦び  
であり度い。

# 大正八年度自一月至十二月收支決算報告

## 收入之部

一金參千七百參拾壹圓五拾七錢 計 金

### 内 譯

- 一金百貳拾貳圓七拾六錢 前年ヨリ繰越在金
- 一金拾九圓也 前年ニ假出シ金受入
- 一金六百參拾七圓五拾錢 會費徵收高
- 一金百〇五圓也 新年宴會々費徵收
- 一金千〇四拾貳圓四拾錢 志納金
- 一金千六百五拾六圓八拾壹錢 書籍賣上金
- 一金百四拾八圓拾錢 假出金ヲ受入ル

## 支出之部

一金貳千九百四拾七圓四拾八錢 計 金

### 内 譯

- 一金千四百貳拾圓拾錢 書籍仕入金

一金貳百貳拾四圓貳拾錢 印刷費

一金百拾參圓拾五錢 通信費

一金參百四拾圓〇五錢 法要及接待費

一金百〇貳圓五拾錢 下足及人夫雇費

一金百六拾六圓參拾錢 器具購入

一金百參拾貳圓六拾八錢 手當及諸雜費

一金貳百圓四拾錢 新年宴會費

一金百四拾八圓拾錢 假出金

以 上

差引金七百八拾四圓〇九錢也

現金在高後年繰越

右之通りニ御座候也

大正九年一月

統一團會計

幹事 玉川由太郎

## 讀者諸君に告ぐ

統一は本月號から、内容を精撰充實せしめて、日蓮主義宣傳の權威ある雜誌に相應しき大刷新を加へました。

次號からは更に紙數を増加する豫定であります。紙價暴騰の時節柄、今の定價では經營の仕方ありません、三月號から一部定價金貳拾錢に改正しますから左様御承知を願ひます。

併て御願しますが刷新されたる「統一」は主義宣傳の爲に猛烈なる奮闘をやる方針であります。文書布教の爲に志ある方は淨財を喜捨されん事を希望します。

産婆 見習生至急募集

看護婦 見習生至急募集

東京市赤坂高樹町十一

柿原看護婦會 電芝三四二四

天下無比 松鶴目藥

主治 〇トラホーム 〇眼内面三顆粒 〇流行目 〇起珠 〇血目 〇爛目 〇熱目 〇打目 〇其外 〇火傷 〇凍傷 〇蟲毒 〇腫物 〇一切

定價貳拾錢

取次所 小石川區春日町十六番地 芹 田

### 日宗法衣專門

### 青雲帽 系教服 袴

### 飯田法衣店

京市佛具屋町五條北

振替口座大阪六八四七

加賀料理 加能亭

日本橋區坂本公園附近 酒は芳醇のキ一本にて着は百萬石の旨味氣質

定價表ハ御申越次第 何時でも御送申上候





(號百三第)

明治三十年二月二十四日第三種郵便物認可  
大正九年三月一日發行(毎月一回一日發行)

明治三十年二月二十四日第三種郵便物認可  
大正九年二月一日發行(毎月一回一日發行)

(號九十九百二第)

統

(卷月二年四十二第)

念珠ならは小野嘉助店へ  
日蓮宗各本山御用達  
顯本法華宗妙滿寺御用達

**御念珠各種**

弊店の特色は實用を旨とし從來  
調進仕り候へば多少に不拘御用  
命願上候

京都市寺町通蛸薬師下ル  
念珠 **小野嘉助**  
商 電話 中二六〇八番  
振替口座大阪一九七二〇番

**布眼の薬** 効能、たい目、かすみ  
目、ぼし目、くもり目、  
ち目、うち目、つかれ目、はやり目、トラホ  
ーム等  
定價壹瓶、拾五錢、廿錢、卅錢、五拾錢、  
七拾錢、壹圓

**血の薬** 定價二包入拾五錢、十  
五包入壹圓、効能、男  
女ちの道、産前産後、めまい、たちくらみ、  
時候あたり、氣絶、のみすぎ、酒毒、婦人  
病、貧血疾、風邪

千葉縣山武郡源村上布田參百番地藥王寺  
布眼藥 **本舖 齋藤日章**  
田血の藥 (御注文は總へて下記振替に)  
賀正 (振替東京第六七九一番)

**日蓮各宗 寺院 御僧**

法衣 草木 直に御聯想下  
京都 三條通鳥丸東入ル町  
**草木本店**  
電話 中七三五番  
振替口座東一一五五九番

東京淺草區三好町二番地  
**草木支店**  
電話 下谷三四三四番  
振替口座東京二四五六八番

初も神佛具を調製する敬虔心を以て奉仕候。

**佛像佛具 調度所**

宮殿幢天蓋一式  
▲普通品定價郵券貳錢封入送呈  
總本山妙滿寺  
總本山妙滿寺  
大本山本國寺  
日宗各教團

京都寺町四條南大雲院前  
舊名「乾清」事  
大佛師 **辻井岩次郎**  
振替大阪八一五七番  
電話 下三二五八番  
●御用仰せ被下候は、叮嚀深切を旨と致候。●

**佛壇佛具一切卸小賣**

店三十具 三十五歳以上 四五歳以上 五十五歳以上 六十五歳以上 七十五歳以上 八十五歳以上 九十五歳以上 百歳以上

京都三條通小橋西入中島町  
卸部 **三法堂 藤田總治**  
各宗御本山御用道  
長距離電話 中二七八三番  
大畫佛具 佛師 振替口座東京二〇七九  
同區小橋東入

小賣部 三法堂佛具陳列場

錢四稅郵 表價定

**生徒募集**

千葉縣千葉郡千葉町院内  
(千葉神社裏通)  
(憲兵屯所向横丁)

私立 **山口刺繡學校**  
校長 **山口京太郎**  
規則書入用の方は御通知次第校則を  
進呈いたします

發行所東京市淺草區北清島町十四番地編輯兼發行人松尾英四郎(印刷人鈴木日雄) (本誌定價一冊) (或拾錢郵稅五厘)

時 言

吾人の所見——誤れる自覺——日蓮の天魔の解——日本文明の正統  
——開顯統一の秘鍵——我が惟神の大道——聖賢の明教——佛教の  
大教化——哲人の出現——過激派の唯一手段——區々の葛藤

日蓮主義の抱負……………本多日生  
社會改造と日蓮主義……………本多日生  
平和會議所感……………山川端夫  
佛教信仰の正統……………本多日生  
世俗諦と勝義諦……………本多日生  
日蓮主義綱要……………井村日咸  
勞働問題根本解決策……………永井米藏  
形骸……………笹川篁堂  
基督教徒としての大矢氏に與ふ……………金島英夫  
記事報道十數件……………  
脚河邊の吹雪……………野村香明子